
チエリー・OH！ベイビー

りきてっくす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チヨリ・オ！ ベイビー

【Zコード】

Z5797D

【作者名】

つきてつくす

【あらすじ】

キュートで超わがままなチエリーお嬢様は今日もご機嫌。でも彼女を取り巻く騎士や海賊たちは大パニック。剣と魔法と近代兵器が入り乱れた、どたばたファンタジーです。

ブルームーンの場合～恋人よそばにおいて（前書き）

こんにちわ、りきてつくすです。この連載を再開するにあたり、第1話から新しく書き直すことになりました。以前にお読み下さった読者様、ほんとに申し訳ございません（土下座つ！）

ブルームーンの場合～恋人よそばにいて

ガーネット色の夜空に、閃光が煌めいた。

乾いた破裂音が数発、澄み渡った夏の夜気を震わせると、まるで万華鏡をのぞき込んだときのように色とりどりの光の花ビラが、星空のスクリーンいっぱいにひろがる。

夏の風物詩、川辺の花火大会……。

天をつらぬく幾筋もの光芒が、夜目にも美しい大輪の花へと姿を変えるたび、辺りからわあっと歓声が上がる。

白いのどを反らして宵空を見上げるあたしの艶やかな洗い髪を、優しい夏の夜風がそっと撫でていった……。

今日は口ロンを変えてみたんだ、彼つてば、ちゃんと氣付いてくれたかな？

ちらと、横を見る。

涼しげに微笑む恋人の目には、刻々と色彩を変えてゆく光の点滅だけが瞬いていた。

あたしは、なぜだかちょっとぴり切なくなつて、浴衣の下にそろえたピザの上に視線を落とす。さつき夜店で買つてもらつた水玉模様のヨーヨーが、手の中でぢやふんと音を立てた……。

不意に、彼の手があたしの肩に触れた。

あたしは、はつとして彼の顔を見る。その涼しげな瞳の中には、ロケットの中に秘めた恋人の写真みたいに、戸惑つたあたしの顔が映つていた。

やだつ、どうしよう……、キスとかしそうな雰囲気になつぢやつ

たりどりつぶよい。……。

「……中隊長殿？」

「ひぬわこ。

彼が、あたしの肩に優しく手を回してきた。あたしつてば、嬉しくてたまんないくせに、ちょっとだけ拒むような素振りを見せたんだ。だつて、大好きな彼に、軽い女だなんて思われたくないもん。今夜は、あくまで純情可憐な女の子を演出して、彼の嗜虐的な欲望に火をつけてやるんだ。

君、とっても良い匂いがするね……、なんて言いながら、彼があたしの洗い髪の中にそっと顔を埋めた。

ああ、どうしようつ……、この分だと、もしかしたらキスだけじゃ済まないかも……。

「ちゅ、中隊長殿」

もう、ひぬわこつてば。

彼の指が、あたしのセミロングの髪をそっとかき分け、白い貝殻みたいな耳に息が吹き掛かるほど唇を近づけてきた。

好きだよ……。

そう囁いて、イタズラっぽい目で、真っ赤になつたあたしの耳たぶをそつと噛んだ。

あん……。

あたし、もうダメだ……。恥ずかしい声が喉の奥からもれてしまつた。

エッチな女の子だ、なんて思われたんじゃないかな……？ でも、

彼が悪いんだぞ、変な事するから。

ついに彼が、少しだけ顔を横に傾けた。間違いない、これって絶

対キスの体勢だ！ やだつ、じつじよつ……。ドキドキ、ドキドキ

……。

こんな事もあるうかと、今日は、何度も何度も念入りに歯を磨いてきたんだ。でも、待てよ……？ 昼に食べたチーズピザのにおいが残つてたらヤバイぞ。たしかガーリック風味だったよなあ……。そんな事を考えているうちに、彼の唇があたしの唇の上に……。ああつ、もうどうにでもしちゃつて！

「中隊長殿ーー！」

あーーー！ もういるきこなあ、せっかく現実逃避してたのにーーー。

テレビのスイッチが切られるように現実世界へと引き戻されたいたたしの真ん前には、老いた下士官の焦燥しきった顔があつた。うげ……。

「如何しました、中隊長殿？ 先程から心ここにあらず、といった感じでしたぞ」

「あ……、打ち上げ花火が

「しつかりして下さい、あれは、敵の迫撃砲です！」

「分かつてるよーー、もう……」

前線司令部のあるモスグリーンの野営テントには、貫通した銃弾の跡が幾つもあいていて、近くで迫撃砲が着弾、炎上するたびに、その穴からプラネタリウムみたいに閃光が差し込んでいた。

夜のとばりが下りて間もないこの鬱蒼とした密林には、しかし深閑とした森の静寂はない。そう遠くない場所に展開している味方陣地からは、もう半日以上も断続的に爆発音や兵たちの悲鳴が聞こえてくるのだ。

そう……、ここからは花火なんて見えやしないし、恋人だつていな。

だつて、ここは戦場なんだから……。

あたしは、長いまつ毛を伏せ、深いため息をついてから、傍らに積まれた段ボール箱に手を突っ込んで、カップラーメンを一つ取り出した。ぺろんとフタをめくり、ポットからコポコポとお湯を注ぐ。半年前、王城から出撃して以来ずっとあたしに付き従ってきた老下士官のライマー軍曹が、すかさず割りばしを差し出した。

「うーん……阿吽の呼吸つてやつだね。いや、条件反射といつべきか。

彼は、気をつけの姿勢を保ったまま、苦り切った表情で報告した。

「先ほどアリーヤ特務曹長から報告がありまして……、昨夜のうちに、半数以上の味方魔法兵が脱走したとの事です」

「ふん、これだからエリートは……。いくら魔法学校を優秀な成績で卒業したといっても、ちょっと戦況が悪くなつたとたん浮き足だつちゃつて、根性ないんだから、もう…」

ほんとは、ちょっとなんともんじゃない。

あたしが国王陛下からお預かりしているこの歩兵中隊は、あのセクハラ司令官の陰謀で、ほとんど作戦らしい作戦もないまま最前線に送り込まれ、もう玉砕寸前の状態にあつたのだ……。

くつそーっ、近衛騎士団長のジョバンニめー、あたしのお尻を触つた事を軍法会議にかけてやると言つたら、すかさず前線に飛ばしやがつて。

この借りはいつか必ず返してやるからなーっ。

「きやあつ！」

突然、もの凄い爆発音とともに地面が揺れた。テントの隅にうずたかく積まれていた弾薬の箱がガラガラと崩れ落ち、折り畳み式の長テーブルとパイプ椅子がひっくり返った。どうやら、敵の放った迫撃砲がすぐ近くに着弾したらしい。

あたしは、尻餅をつきながらも、お湯の充たされたカップラーメ

ンだけは必死になつて守り抜いた。

「中隊長殿っ！お怪我はありませんか？」

「うん、無事だった」

セツセツと食べてしまおう。

「ここは、今や敵の恰好の標的となり、かなり危険な状態です。いつたんデマヴァンド山まで後退しては如何かと思いますが？」

「うーん……、でも勝手に退却したりしたら、ジョバンニのじじいに後で何を言われるかなーっ！」

そのとき、通信兵がヘッドフォンを外しながらあたしに呼びかけた。

「中隊長殿っ」

「あーっ、もう一、つづら若き乙女に向かつて、その”中隊長殿”ってのは止めてくれないかなーっ。せめて、騎士様とかブルームーン様とか……」

「ジョバンニ司令官より入電です」「
げっ！」

あたしは、いやーな予感を抱きながらも、食べかけのカップラー
メンをそっとテーブルの上に置いて立ち上がった……。

つづく……。

ブルームーンの場合～最前線エレジー

「ふざけんな、ばっかやろーつ！」

あたしは、怒りにまかせヘッドフォンを地面に叩き付けた。ライマー軍曹が狼狽しながら訊ねる。

「い、いかがなさいました、中隊長殿……？」

「ちづくしょー！　ねー聞いてくれるー？　ジョバンニーたら、あたしたちにムイムル川の鉄橋を奪還しろなんて言うんだよー。もお！　ムチャな命令ばかり下しやがって、あの野郎……」

あたしが涙目でそう訴えると、歴戦の勇士であるこの老いた下士官の厳つい顔もさすがにサーッと青ざめた。

「な、何ですと？　あの橋を守るのは敵の精銳、第七魔法連隊ですぞ。強力な味方魔法兵の援護があるならともかく、我々歩兵部隊だけでの橋を落とせるとでも……」

「分かつてるとよーつ。でも命令だから仕方ないじゃないかああたしは、もう何日もルージュを引いていない唇をきゅっと噛みしめた……。

しばしの沈黙を破つて、ライマー軍曹がしぶり出すような声で言った。

「……軍人らしく、最後は潔く散りますか？」

ふ、ふざけるなっ、バージンのまま散つてたまるか！

「待つて！　もう一度ジョバンニに掛け合つてみる。なーに、へりくだつてワビを入れてやりやあ、あの冷血漢だつてきつと哀れに思つて撤退させてくれるさ……ははは」

ウソだ……、近衛騎士団長ジョバンニ・カエサルは、そんなに甘い人間じやない。テレビの時代劇に出てくる悪代官よろしく、前線

から撤退させることを条件に、あたしに肉体関係を迫るなんてこと、朝飯前でやつてのける男だ。

おぬしも悪よのう。

ジョバンニのいやらしげヒゲ面を思い出して、あたしの牛乳プリンみたいな玉の肌にふつふつと鳥肌が浮き上がった。
えーん、嫌だよう……。

ボロロン……

そのとき、テントの外からアコースティックギターを爪弾く音が聞こえた。

誰だ、こんな時間に？　いや、時間の問題じゃないか。

ボロロロンボロロンロロン……

そのギターは、最初ロドリー・ゴの『アランフェス協奏曲』を弾こうとしたらしいが、途中から『湯の町エレジー』みたいになってしまっていた。

微妙に音外してゐるし……。

「誰なの？」

あたしは、失望と嫌悪を込めて、傍らに置いてあつた騎士剣の柄を握りしめた。

「ちょっと失礼するよ……」

そのとき、一人の男が窮屈そうに背中を丸めながらテントの入り口をぐぐつてきた。とたんに湿気つた外気が内部に流れ込み、蚊取り線香の煙がほわんと揺らめく。

その男は、くたびれたハンティング帽をかぶり、無精ひげに覆われた口の端に火の付いた煙草をだらーんとぶら下げていた。褐色に焼けた顔は、精悍で彫りが深いが、ひび割れたメガネがだらしなく

ずり落ちた面貌からは、何だか貧乏くさい印象を受ける。

「うーん、イケメンとまではいかないけど……まあ、ちょっとだけイー男つてどこかな。

無遠慮にズカズカと入り込んでくるこの野卑た男の前に、ライマー軍曹が颯爽と立ちはだかった。

「何だ貴様はーっ？」

「俺かい？ 俺は、フレオの街で雇われた傭兵を……」

「ここは、前線の司令部だ。貴様のような傭兵風情が、気軽に立ち入れる所ではないのだぞ。ここに何の用だつ？」

左足をわずかに持ち上げ靴底で煙草の火を揉み消すと、その男は几帳面にも吸い殻を携帯灰皿に収めながら言った。

「どうも、あんたがたの戦況が芳しくないようなんですね、契約を解除してもらおうと思つてさ」

傭兵の男は、ズり落ちたメガネを人さし指でくいつと上げながら、にやけた顔で言った。ライマー軍曹が、こめかみに血管を浮き上がりながら嘲るように鼻を鳴らす。

「ふんっ、貴様ら傭兵なんぞ、ハナっから当てにしてはおいらよ。さつさとシッポを巻いて我々の前から消え失せろ！」

しかし男は、口の右端をにいつとつり上げて笑つた。

「いやあ、さつきまでそのつもりだつたんだがね、すっかり気が変わつちまつてや。ここの中隊長さんが、こんなに可愛いお嬢さんとは知らなかつたもんで……」

可愛いお嬢さんという言葉に、あたしは素早く反応した。あたしつてば、この手のお世辞にはめっぽう弱いのだ。きっと、悪い男にだまされて一生苦労するタイプかもしれないな……とほほ。

「え、貴様ーっ、中隊長殿に向かつてー！」

軍曹の鉄拳制裁がぶうんと飛んだが、彼はそれをひょいと軽くか

わしていおで、何事もなかつたかのよつにあたしの前までやつてきた。

「きれいな金髪だな、ケルトか？」

「え……？ うん、ちょっとぴりガラティア混じつてるけど……」

「え……？ うん、ちょっとぴりガラティア混じつてるけど……」

「ちょっと、あんた酔つぱらつてるでしょ？」

「うん？ ああ、俺は四六時中酔つてないとダメなんだ」

「そーゆーのを、世間ではアル中つてゆーんだぞ！」

「ははは、怒つた顔もまた可愛いな。俺は、ミッキー・三木つてんだ。わつきの話は立ち聞きさせてもらつたが、まあ、俺に任せておけば大丈夫。ムイマル川の鉄橋なんか、俺たちだけで取り返してやるよ」

そう言つとミッキー・三木は、くるつと踵を返しそうとテントから出ていった。出がけに軍曹の肩をポンと叩いて、「明日の昼前に出立すれば、夕方にはムイマル川の上流に着くだろう。夜襲をかけるから照明弾と、あと「ムボートを数隻用意しておいてくれ」と二ヒルな顔で笑つた。

「ちょっと待つて、あたしも一緒に行く！」

「ほう、中隊長さんも来ててくれるのかい？ そりや嬉しいね。美しいジャンヌ・ダルクが一緒とありやあ、兵士の士氣も上がるつてもんだ」

「一応、前線の指揮官だからね。それとあたしの事は、ブルームーンって呼んでくれていよいよ」

「ブルームーンか、うん、いい名前だ」

そう言つて真っ白なギターを肩に担ぐと、右手の指2本でちょこんと敬礼してから、ミッキー・三木は、背中を向け闇の中に消えていった。

ちくしょー、気取りやがつて……。何だかむしょーにムカつくけど……でも、妙に心惹かれてしまうんだよなあ。

「分かってくれる？　この複雑な乙女心！」

思わず口に出してしまった。驚いたライマー軍装は、びしりと氣を付けの姿勢をして、

一は、「私には、分かりかねます!」

と返答した。
……なんて律儀者なんだ。

「あいつは、理でやがて諦める。」

「ああ、どうでしょな。しかし傭兵というものは、ビジネスで戦争してますから、案外報酬に見合つただけの働きはするもんです」

いくらくたの?

「1人に付き1万ユーロ」

卷之二

あと、ギルトへの紹介手数料として、その3倍増し

お前で もじかして ノガたマニ!

何としても金棒を落とさないと國三郎には向けてき

かくのう

あたしは、99パーセントの不安と残り1パーセントの期待を胸に、寝心地の悪い鉄パイプの簡易ベッドにぐらんと横になつた。

卷之二

ブルームーンの場合～明日に架ける橋

その光景は、まるで不夜城だった……。

ムイムル川の鉄橋を守る敵の野営駐屯地には、索敵用のサーチライトが縦横無尽に交差して、それはまるでナイトクラブの天井に吊されたミラー・ボールみたいに幻想的に夜の闇を照らしていた。

その鉄条網で囲われた広大な敷地には、夜目にも分かるほど真っ白い炊煙が星空を衝いて、幾筋も、幾筋も立ち上っていた……。

「ね、ねえ……、敵の数つて、およそどれくらいなの……？」

あたしは、これから死闘を繰り広げるであろう敵の巨大さに改めて驚き、思わずビビってライマー軍曹にそつと尋ねてみた。これだけ炊煙が立ち上っているところをみると、相当数の兵がある野営地に駐屯している事は間違いない。

ライマー軍曹が、手にした双眼鏡から目を離し、鼻の頭をぽりぽり搔きながら困ったような顔で答える。

「正確な数字は把握しておりませんが……、まあ、2千5百から3千といったところでしょうか……」

「えーっ！ あたしたちの十倍以上の兵力じゃないかあ！」

帰ろかな。

昼前に前線基地を進発したあたしたちの部隊は、夏の太陽が西の彼方、デマヴァンド山の稜線にわずかに夕日の片鱗を残す頃合いになつて、ようやく目的地であるこの丘陵にたどり着いた。この丘の西側斜面を下つたところには、急カーブしたムイムル川が、こちら側にぐつとせり出していて、敵に見つかることなく渡河するには絶好のポイントとなつていて、

まず別動隊が川を渡つて敵の背後に回り込み、頃合いを見計らつ

て本隊が正面から突撃、敵を挟み撃ちにしておつとこつのが今回の作戦なのだが……。

「ねえ、ミキ・ミキ……」

「俺の名は、ミシキー・三木だ」

ミキ・ミキが人さし指でずり落ちたメガネをくいっと持ち上げ、ちらとあたしの顔を一瞥した。

「たいして変わんないじゃん！　いや、そんな事よりさ、別動隊の連中うまくやつてくれるかなあ。ビーも、血の気が多くて掩蔽行動には向かないような連中ばかり、あっち側に行っちゃった気がするけど……」

「心配するな、あいつらは百戦錬磨の傭兵どもだ、ゲリラ戦なんかは、それこそ得意中の得意……」

ミキ・ミキがそこまで言いかけたとき、

シタタタタタッ シタタッ シタタタタタタタッ ……

暗碧とした夜の森に機銃音が響き渡り、夏の夜空に光の尾を引きずつて数発の曳光弾が飛び交った。

「しまつた、別動隊が敵の伏兵と遭遇したか！」

「えーっ、だから言わんこっちゃないつ。ビーすんのよー、もう！」

「くそっ、こうなつたら仕方がない。玉砕覚悟で全員突撃だーっ！」

ミキ・ミキは、立ち上がりてみんなに呼びかけた。正規兵の半数以上が逃亡し、その不足分を荒くれの傭兵どもで補っていた歩兵部隊は、待つてましたとばかり喚声を上げた。

「おーっ！」

「やつたるゼーっ！」

「お、おー、いらっしゃー！　ちょっと待て、ミキ・ミキー、そんな、行き当たればつたりの作戦つてあるか！」

あたしが止める間もなく、ミキ・ミキは2百人あまりの歩兵部隊を引きつれ、怒濤のごとく大地を踏み鳴らして敵の野営地めがけ突進していった。

「勝利を我らに！」

「アッラー・アクバール！」

……ど、どこの国から来た傭兵だ？

漆黒の闇の中、銃声とともにチカチカと閃光が煌めき、ときおり手榴弾の凄まじい炸裂音が轟きわたる。たちまち、敵地からもけたたましいサイレンの音が鳴りわたり、やがて天地を焦がすような魔法と重火器の応酬が始まった……。

「ど、ど、どうしよう？　ねえ、ライマーっぽ……。やつぱりこれは、指揮官として全兵に撤退を命ずるべきだよね、ね？」

あたしは、涙目になつてライマー軍曹に贊意をもとめたが、彼は悟りを得た賢者みたいに重々しく言った。

「もう、どうにもなりませんな……。こいつなつたからには、最後は軍人として潔く……」

だから、バージンのまま散るのはイヤだつてば！　そんなに散りたきや、お前一人で散れよ……。

尖兵は、すでに血ミドロの死闘を繰り広げていた。

敵の火炎魔法でこんがりと良い具合に焼かれる者、風刃魔法で金太郎飴のように切り刻まれる者、氷結魔法で等身大のフィギアみたいに固められるもの……。

「あわわ、大変だ！　あたしが国王陛下からお預かりしている大事な兵たちが……」

絶体絶命の状況下で、あたしは緊張のあまり思わずパンツにじわ

つと染みをつくなってしまった……ような気がした。

どうして……どうして、あたしみたいなうら若くてキューートでし

かも魅惑的な女の子が、こんな七難八苦を重ねなくちゃなんないの

……？

あたしは、陛下から歩兵中隊長を命ぜられ、王城を出撃してより今日までの辛酸をなめるような苦難の日々を思い出し、何故だかふつふつと怒りが込み上げてくるのを感じた。いわゆるヒステリーフ

てゆーやつ？

よく分かんないけど、もんのすゞぐ頭来たーっ！

「よ、よーし……見てろよーっ！ 女の子が、いつたんケツまくつたらどんな恐い事になるか、思い知らせてやるーっ！」

あたしは、陛下より挙領した騎士剣をすらりと抜き放つと、そのオリハルコン製の刀身を、吸い込まれそうなほど耀く星空に向かつて高々とかかげた。

あかぎの山もこよいかぎり……などとバカな」と言つてゐる場合じやない！

「みんなーっ、あたしに続けーっ！」

「おーーっ！」

ライマー軍曹以下、体育会系バリバリの歩兵部隊を従え、あたしは猛然と斜面を駆け下った。

戦況は、十倍以上の兵力差があるにもかかわらず、一進一退を繰り返していた。

でも、ミキ・ミキって凄い！ さすが、でかい口叩くだけの事はあるね。

彼は、軽機関銃を腰だめに乱射しながら敵の只中に突っ込んでいくと、すかさず軍用トラックをつかぱらい、それを部下に運転せながら自分は荷台の上に乗つて、敵の頭上に手榴弾を雨あられとばらまいている。

ミキ・ミキって、もの凄くクレイジーだ！

あんなアブナイやつとは知らなかつたよ。とりあえず恋人候補のリストからは外しておこう。……。

よーし、こつちもガンバルぞー！

あたしは、騎士剣を眼前にかざすと、呼吸をととのえ古代ケルト語の呪文を長々と唱え始めた。

やがて、周囲の空間がぐにゅりと歪み、陽炎が立ち上るように景色がゆらゆらと揺れ始める。つーんとオゾンの匂いがただよい、わき出す光の粒子が、アゲハチョウの鱗粉みたいに5色に煌めいて、あたしの周りをぐるぐると回転し始めた。……。

やがてあたしは、眩いほどの神聖な光のオーラに包まれていった

……。

見たか！ 騎士の称号を得たものだけが使うことを許される聖靈魔法、ホーリー・プロテクションだ！

これで敵の攻撃魔法はあたしには効かないぞ！ まあ、おかげでこつちも魔法による攻撃ができるけど……。

とにかく、こつから先は怒濤の肉弾戦だ！ 総員、突撃ーーー！

つづく……。

ブルームーンの命令へ戦場ブギワギ

飛び交う銃弾は、鎧をつがち、心をつらぬき、勇気をくじく……。
吼え狂う魔法は、軍服を焼き、理性をつばい、憎悪を燃えあがら
せる……。

戦場で演じられる「コマは、まるで地獄変のよ」……。

でも、あたしは戦う。戦い続ける。だって、騎士だから……。
近衛騎士として王に忠誠を誓ったその日から、女としての幸せを
捨て戦場に生きる覚悟を決めたんだ……。
だから、あたしは……あたしは……。

「中隊長殿一つ、ひょっとして、また何か現実逃避しようとしてお
られませんかー？」

「ギクッ！　す、するどー……。ライマー、お前つてホント、人間
観察するどーよ。

「この戦争が終わったら、さつと除隊して占い師なんか始めたら
どう？　評判になると思うよ」

「それは、ちょっと無理ですなあ……。昔から、若いおなじは苦手
なもので」

あ、あたしだって一応、若いおなじの端くれなんだけど……。

ムイムル川の鉄橋をめぐつて激突した両軍は、歩兵と魔法兵、双
方入り乱れて上よ下よの大乱戦を繰り広げていた。

当初、敵を挟撃しようと試みたあたしたちの作戦は失敗したけれど、夜襲そのものは上手く効果を上げたみたい。鎧袖一触とまではいかないものの、我が歩兵中隊はこの夜戦をなんとか優位に戦つていた。

国王陛下、あたしガンバッテます！

魔法兵は、基本的に白兵戦が苦手だ。

なぜなら強力な魔法を発動するためには、それに見合^ううだけの長つたらしい呪文^{スペル}を詠唱しなければならないからだ。その点、剣はただ振り回せばいいし、銃はトリガーを引くだけで自動的に弾が出る。接近戦においては、この差って大きいよね。

ま、あたしみたいに有能な騎士は、どっちもそつなくこなすけど。

なんてちょっとぴり自画自賛していたら、突然フレイルを振りかざした敵兵が側面から襲い掛かってきた。

この愛らしいファーネフェイスに傷をつけようつてかあ？ 罰当たりめ！

「死いねええええーっ！」

な、なんて下品な掛け声なんだ……。

敵の振り回すフレイルの鋼鉄製チェーンがぶーんと唸りを上げてあたしに迫る。チーンの先には金平糖みたいにトゲトゲした鉄球がぶら下がつてて、当たつたら超痛そう……つてゆーか絶対死ぬつ！

あたしは、新体操選手みみたいに華麗なステップをふんでその攻撃をうまくかわすと、電光石火のはやわざで騎士剣をひゅんと一閃させた。

「えーいつ！」

バツコーン！

「ぐわあ……」

重たい鎧をまとった敵の兵は、目から火花をちらしながらスクランプ工場に積まれた鉄くずみたいにその場にぐしゃりと崩れ落ちた。いつちょ、上がりつ！

しかし休む間もなく、背後の暗闇から新手の敵があたしに向けて長槍を突き出してきた。その研ぎ澄まされた槍の先端が氷柱みたいに冷酷な煌めきを放ち、しゅっと風を切つてあたしのスリムかつグ

ラマラスなナイスバディに迫る！

「くたばれえええーつ！」

なんて稚拙な掛け声なんだ、お前らボキャブラリイ貧困の権化か

……？

あたしは、バレリーナみたいに可憐な身じなしでぐるぐると槍の横をすり抜けると、そのままの勢いで騎士剣をふり回し、渾身の力を込めて敵の兜をぶつ叩いた。

「やーつ！」

ベツコーン！

「うへえ……」

またしても敵は、目からパチパチッと火花をちらしながら車にひかれたカエルみたいにその場にぺしゃんと伸びた。

「…………ライマー、あたしあ腹減った、少し休憩しよう

あたしが、じわっと目に涙を浮かべてそう訴えると、この老いた下士官は、腰をぐつと落とし、敵が密集している辺りに狙いをさだめてグレネード・ランチャーをバヒュン！ と一発ぶち込んでから面倒臭げに言つた。

「携帯用の食料は尽きました。何か食べたきや、この戦闘に勝利して基地に凱旋して下さい」

「あー、冷たいんだー、その言い方ー」

次の瞬間、ドゴーン！ と銃爆音が轟き、黒煙とともに数十人の敵がいっぺんに吹き飛んだ。

それにしても、敵はいつたい何人いるんだ？ もう相当数やつつけたはずなのに一向にその数を減らす気配を見せないじゃないか。まーつたく！ ボウフラジやあるまいし後から後からつじやうつじやと……。

「ねえ、ライマー。あたしたち、もうかれこれ半数以上の敵を掃討してるよね？」

ライマー軍曹は、迫り来る敵の一団に向かつてサブマシンガンをシユタタタタタッ！と掃射しながら答えた。

「いやいや、まだ4分の1くらいでしょ」

彼の銃口が火を吹くたびに薬莢が景気よく飛び散り、夜店の射的場に並んだ景品みたいに敵がパタパタと倒れ伏す。

「うつそー、まだ4分の1？ ひえー、あたしもうダメだあ……」

あたしは思わず騎士剣を放り出したい衝動にかられた。

軍人になんか、なるんじゃなかつた……。

騎士になるつて言つたらパパとママ、猛反対したつけ、なにバカな事言つてんのつて……。両親の忠告を素直に聞いておけばよかつたんだ、あたしつて親不孝……。

大人しく〇〇でもやつてりやあ、いまさら合コンかお見合いパーティーで素敵な彼氏をつくつて、夜景を望むお洒落なマンションで二人掛けのソファーに並んで、ラブラブいちゃいちゃ……つて違う違う！

あたしたち軍人が敵の侵略から祖国を守つてゐるからこそ、みんなが安心して、合コンに、お見合いパーティーに、夜景を見ながらラブラブいちゃいちゃ……。

ちっくしょー、あつたまたたーつ！

あたしは騎士剣を構え直すと、群がる敵に向かつて猛然と突進した。

「お前らが悪いんだーー！ いきなりひとの国に攻め込んで来やがつて、みーんなみーんな、お前らのせいだーー！」

あたしは、剣を振りかぶると防御体勢をとる敵の真つ只中へと突っ込んだ。

ちなみに、自慢じゃないけどあたしは刃物が嫌いだ。だつて野蛮でしょ？ 刃物で人を切るなんて。

よつて、この剣は刃引きにしてある。人間はおろか、カステラだ

つて切れやしないんだ。

そーゆーわけで、あたしは敵を……。

「「」の剣で殴り倒すのさーつ！」

「ぱつこーん！　べつこーん！　ほつこーん！　きつこーん！　がつこーん！

あたしが矢のように走り抜けたあとには、ボーリングのピンみた
いに跳ね飛ばされた敵がごろごろと地面を転がつた。

うーん、われながらすごい破壊力……つてもう体力の限界だ。
「ひーん、これじゃキリがないよお……。いくらオリハルコン製の
剣が軽量だからといって、こうブンブン振り回してちゃさすがに疲
れるし、一の腕が太くなつたら困る！　もし、あたしがイブニング
ドレス着られない体になつてしまつたら一体誰が責任取つてくれる
んだあ！」

あたしはその場にペシャんと座り込んだ。

「もう絶対ムリ……甘いものが食べたい……」

戦闘不能におちいつたあたしを見て、ここぞとばかり得物を振り
かざした敵が殺到する。あたしは、目を閉じて覚悟を決めた……。

なーんだ、あたしつてばこんな所で死んじゃうんだ……この世に
生まれ出て18年、思えば短い人生だったなあ……。

シャー・ナーメ教会の司祭様は、あたしを見るなり

「君は、どう見ても間違いなく長生きするよ、わっはっは！」
つて大笑いしたけど、思いつきり早死にじやないかあ、ほんと神
様つて当てになんないよね。

唯一の心残りは、バージンのまま逝くこと……きっと天国でバカ
にされるんだろうなあ……。

なんて考えながら自分の半生を走馬燈のようふり返っていたら、

車のヘッドライトがあたしに急接近してきた。やつて来たのは白馬の王子様ならぬ、軍用ジープを乱暴に乗り回す傭兵のミキ・ミキ。

「おーい、ブルーメーン！ こっちだ、こっち、早く乗れ！」

「……あたし、もうダメ、動けない」

「なに言つてんだ、だらしない！ ほら、これをやるから大人しく言つ通りにしろ」

見ると、ミキ・ミキの手には、敵の食料庫からくすねてきた袋詰めのアンパンがぶら下がつていた。あたしは、加速装置を作動したみたいに素早くジープに飛び乗った。

「わっ！ それ、ちょうどいい」

その直後、あたしがへたり込んでいた辺りの地面に、ぶすぶすすすと無数の刀槍が突き立つたのであった……。

間一髪セーフ！

つづく……。

ブルームーンの場合～パンクの騎士

「 もやあ… 」

まるで、波の上をすべるモーターボートみたいにボヨンボヨン悪路を飛び跳ねながら、ミキ・ミキの運転するシユビムワーゲンが軽快な走りで敵兵の合間をかいくぐる。

それにしても、エンジンのうるさい車だな。

見ると、後部座席のすぐ後ろに、空冷式の水平対向4気筒エンジンが、ほほむき出しの状態で据え付けられていた。それが機嫌の悪いドライボンみたいにガオガオ唸りをあげるもんだから、もう、やかましいのなんのつて……。

そしてフルオープントップの座席には、埃っぽい風が容赦なく吹き込み、あたしのブニーブニ軟らかいほっぺは、風圧のため百面相したみたいに歪んでしまう。自慢の輝くよつた金髪だって、ボワーって爆発したみたいに風になぶられて、もう最悪。

うう、田を開けられないよお……、リップグロスに、砂がベタベタくっ付くし……ペッペッ！

「 ねえ、もつとましな車なかつたの？ 乗り心地だつて超悪いし、何だかバスタブに車輪くつつけたみたいで格好悪いよ、この車」「 ドライブしてるわけじゃねえんだ、ぜいたく言つなよ。それにこいつは水陸両用なんだぜ」

うーん、言わてみれば確かにこの車、ケツんところにスクリューみたいのがくつ付いてるよな……。でもこんな鉄の塊がちゃんと水に浮くのか？ かちかち山の泥舟みたいに、あつけなく沈むんじゃなかろうな……。そんな用途不明な装備より、防弾ガラスのハードトップでも付けてほしかったよ、あたしとしては……。

ルビーのピアスをつけた可憐な耳元を、流れ弾がヒュンヒュンか

すめ、あたしは思わず首をすくめながらため息をついた。

「なあ、ブルームーン」

「なに?」

エンジン音がうるさくて、自然と声が大きくなる。

「前から言おう、言おうと思つてたんだが……」

「え……」

おいおい、もしかしてこんなところで愛の告白かあ？ いるんだよね、相手がパニクつてるとき、どでかくとに紛れてサラッと口クツチやうヤツ。考えるヒマを取れないってゆうの……。

「あ、あたし見た田よりプラトニックだから……。遊びだつたら許さないからね」

「いや、そういうんじゃなくつてや……」

ミキ・ミキは、何だか言いにくそうに首の後ろをボリボリ搔いた。「その鎧つて……、やっぱりコスプレっていうやつか？」

「……なつ」

あたしは、赤面した。

「ばかな事言うな！」「この鎧はな……」

この、ど派手で超おマヌケなショックングピンクの鎧は、我が祖国ペーシュダード王国の近衛騎士団に伝統的に受け継がれる女騎士のコスチュームだ。オリハルコンという軽量で丈夫なレアメタルで造られているので、着心地は抜群で、防御力にも優れるが、いかんせんデザインがちょっとアレなので……。

正直、着るの嫌なんだよね。

「ミキ・ミキ、おまえ今、なんかイヤらしい事考えてるだろ？」

あたしは、無意識に足をぎゅっと閉じた。この鎧は、なぜだか太ももの部分が思いつきり露出しているのだ。ものすごく防御力に難がありそしが、デザイン的にはかなりセクシーだ。

「言つとくが、あたしはまだバージンだ。もし襲われたら全力で抵抗するからな」

ミキ・ミキは、ははほと白い歯を見せて笑った。あーつ、バカにしたなあーつ。

そのとき、前方に敵魔法兵の一個小隊が呪文^{スペル}を詠唱しながら立ちはだかってるのが見えた。彼らの周囲を陽炎と赤いオーラが、まるで夜光虫みたいに包み込んでるとこと見ると、どうやら火炎魔法で攻撃してくるつもりらしい。

「しつかり掴まつてろよ、しゃべると舌噛むぜ」

ミキ・ミキが、ぐんとアクセルを踏み込んだ。

「あ、安全運転よろしく……」

小振りなシユビムワーゲンの車体が、矢のように加速した。

とたんに、前方でフラッシュをたいたような閃光が走り、マグマのようなくわきく紅蓮の炎がもの凄い勢いでこちらに迫ってきた。

「来たぞっ」

ミキ・ミキが急ハンドルを切る。

シユビムワーゲンのベージュ色の車体が、弧を描いて急旋回した。

「きやーっ！」

あたしは、あやうく遠心力で車外に放り出されそうになり、フロントウインドウのフレームに必死でしがみついた。

「ちょ、ちょっと… 亂暴な運転しないでよ。この車、シートベルトないんだからあ！ つてゆーかドアすらも付いてないじゃん！」

あたしの声が聞こえているのか、いないのか、ミキ・ミキはスタッフマンよろしく、何度もギュワワーンと派手にハンドルを切りながら敵の攻撃をかわした。あたしは、今度こそちよっぴりチビってしまったかもしねい……。

「おい、ブルームーン！」

「えつ、な、なに？」

「せいで反撃しろ」

ミキ・ミキがあーいでしゃくって示す先には、あたしがさつきから

見て見ぬふりをしていた物騒なアイテムが不気味に黒光りを放っていた。このシユビムワーゲンの助手席には、なんとフ・92ミリ機関銃が備え付けられているのだ。

「ば、ばか、仮にも誇りある近衛騎士が、こんな無粋な飛び道具なんか使えるもんか」

再びミキ・ミキが急ハンドルを切った。車体のすぐ横を炎の塊が「じうーっとかすめ、ボディがちりちりっと焼けた。

「じゃあ、一人仲良くバーべキューになるか？」

そう言つとミキ・ミキは、車の方向を転じ、敵魔法兵の一団に向かつて猛然と突進していくた。

ええい、ままよ、もうどうにでもなれってんだ！

あたしは中腰で立ち上がると、おつかなびづくり機関銃のグリップを握りしめた。

シユタタタタン！ シュタタツ、シユタタタタタン！

あたしの白魚のような指先がトリガーを引いたとたん、両肩に鈍い反動を伝えて機関銃が火を吹いた。たちまち、幾筋もの光芒が敵のいる辺りに吸い込まれていって、あたし達に魔法を放つていた敵の小隊は、散り散りになつて逃げ始めた。

な、なんか近代兵器の威力を知ると、苦労して魔法を習得するのがバカらしくなつてくるなあ……。

「おいブルームーン、ちょっとあれを見ろ」

ミキ・ミキの指差す先に、赤茶けたレンガ造りの大きな倉庫が見えてきた。夜の闇の中、その倉庫はミュージカルの舞台みたいに華麗に数多くのスポットライトで照らし出されていた。

その倉庫を、自動小銃を担いだ大勢の敵兵が厳重に守つている。よっぽど重要なアイテムを保管してあるんだろうね。

「あの中に、この戦闘の勝敗をにぎる鍵が收められてるような気が

するんだ。ちよつとあいつをぶつ壊してみようぜ」

ミキ・ミキが口の右端をにいつとつり上げて笑った。ほんつと、
こいつって乱暴なやつだな、いやむしろ悪党と言うべきか……。

「ぶつ壊すつたつて、けつこう頑丈そうだよ、あの倉庫。そう簡単
には壊れないと思つけど……」

「ちよつと後ろの座席を覗いてみてくれ」

あたしは嫌一な予感を抱きながらも、恐る恐る後部座席をふり返
つた。はたして、そこには見た事もないような武器がでーんと鎮座
していた。それは、武骨なブリキ細工の天体望遠鏡みたいな形をし
ていた。

「…………な、なにこれ？」

「フロミン・アサルト・ロケットランチャーだ」

あたしは思わずかくんと腰が抜けるのを感じた。機関銃の次はロ
ケットランチャーかよ、人を何だと思ってるんだ！

「無理…………あたし、こんな物扱えない」

「大丈夫、そいつは発射チューブがファイバープラスチックで造ら
れていて、総重量は3キロしかないんだ。女の子でもじゅうぶん扱
えるさ」

「いや、そういう問題じゃなくつて……」

「おい、敵がこっちの存在に気づいたぞ。はやくそいつをぶつ放せ」
「くつそつ…………、有無を言わせないつもりだな。よーし、もうどー¹
なつても知らないぞお。

あたしはへっぴり腰で立ち上ると、そのロケットランチャーを
おつかなびっくり構えた。

「い、こんな感じでいいのかな…………？」

「おう、ずいぶんと様になつてるじゃないか」

ミキ・ミキは、ずり落ちた眼鏡を人さし指でくいつと持ち上げな
がら、につと笑つた。

「でも気を付けるよ、注意しないと、発射したときの反動で肩の関

節を外すからな」

「アホかっ！」

つづく……。

ブルームーンの場合～レッドスネーク、カモーン！

ずしんと大地が鳴動した。同時に、夜の駐屯地にその威容を誇るレンガ造りの倉庫が、一瞬だけ昼間のように照り輝いた。

あたしが、シコビームワーゲンの助手席から放つたフロミコ・アサルト・ロケットランチャーが命中したのだ。

高位魔法使いによる爆炎魔法にも匹敵するその破壊力は、頑強な倉庫の壁に軽々と大穴を空け、守備していた敵兵を紙くずみみたいに吹き飛ばした。

ちなみに、あたしも座席の上ですつこけて、シートの硬い背もたれにしたたか頭をぶつけてしまった。

「いつたーい…………、頭がバカになつたら、どうするんだあ」

あたしが涙目になつて打つた後頭部をさすつていると、ミキ・ミキがジッポーでタバコに火を付けながらぼそつとつぶやいた。

「パンツ見えてるぞ」

「きやあ！」

あたしは、はしたなく抜げていた足を閉じ、ぴょこんと素早く起き上がると座席の上にお行儀良く座り直した。

「ミキ・ミキのバカ！ ハツチ！ 変態！」

パンツのシミを見られたかな、絶対見られたよなあ……、ふえーん、赤つ恥だあ！

あたしは、今度から多少カツコ悪くともブルマをはいてこよつと固く心に誓つた。

「よし、あの中に何が隠してあるのか見に行こつぜ」

ミキ・ミキは、あたしの傷ついた乙女心など意に介さぬよつて、

くわえタバコのままギアをローに入れ、シユビムワーゲンを勢いよく発進させた。

卷之三

近くで見ると、その倉庫は一風変わった造りをしていた。ガラスのない窓には全て厳重に鉄格子が嵌められ、その窓に比して、やたらに吸排気用のダクトの数が多いのだ。そして正面にある鋼鉄製の頑丈な扉は、壁一面を覆い尽くすほどに巨大だった。

いつたい何が入つてゐんだらう?

あたしたちは、倉庫の壁に穿った大穴の前に車を止め、その奥の暗がりをじっと見つめた。

「なんか不気味だね……」

るのを感じる。

ԵՐԵՎԱՆԻ

「なに、あの音？」

まが子「お火の立たぬる方の奥から
急略の悪い音が聞こ

それは、何て例えればいいんだろ？……、蒸気機関から水蒸気が漏れ出すような……、いや違うな、あれはそう、ほらつ、ガラガラヘビの鳴き声だ！

શાનદારનું

突如、倉庫にぽつかり空いた穴から巨大な爬虫類の頭部がぬつと現れた。

それは、皮膚全体が赤褐色のウロコで覆われ、さらに表面を又メヌメとした粘膜が覆い、今にも生臭いにおいがぷーんと漂つてきそうな気色悪い質感を保っていた。一枚貝のようにぱっくり開いた口にはノコギリみたいな歯が生えそろい、その隙間から絶えまなく黄色い唾液がつうーっと糸を引いて垂れている。

そして感情のかけらもない濁つた蛇眼がぼうつと赤く光り、あたしたちと田が合ひつと、とたんにギラシと凶悪な輝きを放つたのだ。

「 も も もー、なによ、なによ、なんなのよ、あにつわー！」

「……そつか、妙な建物だと思つていたが、これは召喚獣の飼育施設だつたのか」

「落ち着いてないで、もつもと車を出しなせこよー。」

あたしが背中をバンと叩くと、ミキ・ミキは「ゴホゴホ」と咳き込みながらシコジムワーゲンを急発進させた。タイヤが軋み、砂煙を巻き上げるなか、シート「こしにそつと後ろを振り向く。

崩れかけた倉庫の壁を粉碎して全容を現したそいつの正体は、2つの頭部を持つ多頭竜だつたのだ。

「 げ……、あれつてもつと、この前リッシュヘルムの町を滅ぼしたのと同じやつだよ。」

「ちくしょう、何か良いもんでもあるかと思つてつづいてみたら、こつやとんだ藪蛇だつたぜ……」

「ほんつと、あんたの言つとおりに行動してたら、くくな事にならないんだから。どーすんのよ、これから？」

ミキ・ミキは、ちよつとのあいだ難しい顔で思案していたが、不意に口の右端をにいつとつり上げて笑つた。こいつが、こーゆー顔をするときは、要注意だ。間違いない、何か口クでもないことを思いついたときだから。

「 へへへ、いいこと思ついたぜ」

「 まひ、やつぱつ……。

突然、ミキ・ミキは、思つくりハンドルを切りながら、サイドブレーキを引いた。

「 も も もー。」

シコジムワーゲンのタイヤが悲鳴を上げ、車体がスピントーンし

て180度方向を転じる。

「な、な、なんて乱暴な運転するのよー。」

「こつまさか、わざとやつてるんじゃないだろうな？　あたしは、3度目のシミをつけてしまったパンツを、もつ洗濯せず捨てる」とに決めた。

「おじブルームーン、あの化け物に向けて機関銃をぶつ放せ」

そう言いながら、ミキ・ミキは、アクセルを踏み込みショビムワーゲンを多頭竜に向けて急接近させた。

「ば、ばか、こんなちやちな銃火器があいつに通用するもんか！」

「いいんだ、やつを怒らせるのが目的なんだから」

「え、それってどういう事……？」

そう言っているあいだにも、車は砂煙を巻き上げて疾駆し、あのおぞましい多頭竜の姿があたしの眼前にどんどん近づいてくる。あたしは、もう、なかば投げやりな気持ちになつて機関銃のグリップを握りしめた。

ええい、もうどこのでもなつちやえー！

タンタンタンタンタンタン…

機関銃の銃身と多頭竜の頭部とを、幾筋もの光の線が繋いだ。弾丸が次々、夜の闇に浮かび上がる多頭竜のシルエットに吸い込まれてゆく。

でも、あの硬いウロコに覆われた体じゃあ、傷も付かないだろうなと思っていたら、案の定、多頭竜はひるむどころか怒りを爆発させ、天にも届くほどの咆哮をほとばしらせた。

そのエンジン音をもかき消す野太い叫び声が、夜の戦場をビリビリと震撼させる。

多頭竜は、合計4つあるガラス玉のような目であたしを睨みつけ

ると、たちまちその巨体を躍らせた。

「や、やだつ、こつちに向かつてきたわよーつ！」

「それで、いいんだ」

ミキ・ミキは、再びハンドルを切ると、猛り狂つた多頭竜から猛スピードで逃れはじめた。

多頭竜は、トカゲの類がみな走るときどきするよつこ、その巨体をくねくね左右に揺すりながら猛然と追いかけてくる。

どつ、どつ、どつ、どつ、という地響きが、車に乗つていても体に伝わつてくるのだ。

「それでつ？ それでつ？ これからどーすんの？」

あたしは、半べそれをかきながらミキ・ミキの腕にしがみついた。

「敵が今回の戦闘にあの多頭竜リゴドラを投入してこなかつたところを見ると、どうやらあいつを制御できるだけの力を持つた召喚士がいないと見た」

「……だから？」

「よーするに、今のお化けもんには、敵も味方もまったく区別がつかないつてことさ。だから、あいつを敵の密集している辺りに誘導してやれば、敵兵は次々とあいつの餌食になり、たちまちその戦力を減らすつて寸法さ。どうだ、名案だろ？」

「そ、そうかな……」

あたしは、パニックのため明晰な思考能力を完全に失っていた。自信たっぷりにずり落ちた眼鏡をくいつと持ち上げるミキ・ミキを見ていると、ひょつとして上手くいくんじゃないかつて気になつてしまつ。

「あ、見て見て！ あそこには敵が陣地に使つてるフレハブの兵舎があるよ」

「よしつ、まず手始めに、あの場所に突つ込んでみるか

「えつ、突つ込こむつて……？」

ミキ・ミキは、カクンとシフトダウンしてから、アクセルをべたつと踏み込んだ。とたんにシュビムワーゲンが加速し、あたしの華奢な体がグンと背もたれに押し付けられる。

「いいか、ブルームーン。姿勢を低くして、両膝のあいだに頭を入れるんだ」

「うん、分かった……って、ちょっと待ったあ！ これって旅密機が不時着するときの緊急姿勢じゃないかあ！」

兵舎の窓の中、慌てふためいて右往左往する敵兵の姿がグングン近づいてくる。

「ちょ、ちょ、ストップ、ストップ！ ひ……人殺しーっ！」

あたしの恐怖に引きついた悲鳴が、多頭竜の甲高い咆哮ボアノとぴったり重なった。

つづく。

ブルームーンの場合～夢は今も、夢のままや……

青い空までピンク色に塗りかえてしまいそうな、そんなみ」とな
桜吹雪が、何度も、何度もあたしたちの視界をさえぎつている。
太陽の匂いをいっぱいにつめ込んだ麗らかな春の風が、ふわっと
あたしの髪を舞い上げるたび、通学路に張り出した桜並木のアーケ
ードから鮮やかなピンク色の花びらが、じっと舞い散るのだ。

3年間、通い続けたこの並木道とも、ついに今日でお別れかあ……。

あたしたちは、はき古したカレッジショーズで一步一歩踏みしめるように、歩き慣れた石畳を学舎へと向かっていた……。

「ああ、思い出すなあ……」

「何が?」

「ほら、入学式のとき、ブルームーンつたらさあ、校門の前でわいつく3年の男子とケンカになっちゃって……」

「そうそうーーー入学初日から停学になつたのつてあんただけなんだよ。王立魔法学校創設以来はじめてのことだつて、担任のマイヤーせんせ、ずいぶんと嘆いてたもん」

「うーん……、二人とも、やなこと憶えてるなあ」

「わたしは、あのとき初めてあんたと出会つて、いつもとんでもないヤツとクラスメートになつたもんだと、ちょっとびり憂鬱だったのよ」

「えーーー、ひどーーい、あんたつてば、そんなこと思つてたの?」

「ははは、だつて、今までこんな破天荒なおんば娘、見たことなかつたもん」

「……でも、そのブルームーンが、まさか王国騎士団の訓練過程に進学するとはねえ」

「な、なによ……」

「だつて、あそこに入るのつて下手な大学に進学するより断然、難しこつて聞いてるよ」

「そりそり、あんたは自然魔法の学科試験、のきなみ落第点とつてたじやない……。ま、体育の授業だけは、抜群の成績だつたけどね」「それに騎士つてさあ、人一倍正義感の強い者じやないとなれないんでしょ？」

「なんだよー、あたしが悪人だつてゆーのかあ？」

仲良しのミーシャとガブリエルが、立ち止まって空を見上げた。あたしもつられて、海の底みたいに真つ青な空をふり仰ぐ……。光の粒子が、プリズムで分解したみたいに七色に煌めいて、あたしの長い睫毛に降りそそいだ。

「…………ううん」

ミーシャが、空を見つめたまま首を振った。

「ブルームーンはいつだつて正義の味方だよ……」

ガブリエルも、まぶしそうに目を細める。

「そうだよ、わたしたちが困つているとき、いつも助けてくれた。不良たちにイジメられたときだつて、ブルームーン、すぐに助けに来てくれたもん……」

「ふふふ、全員、病院送りにしちゃつたけどねーっ」

「ちょっとお、それじゃまるであたしが不良も一日置く、スケ番みたいじゃないかあ」

ふいに、一人があたしの顔を見た。その目がちょっとびり哀しそうだつたので、あたしも何だか切なくなる……。

「…………でも、これからは、わたしたちの知らない所で、国を護るために戦うんだね」

「う、うん、まあね……、無事に騎士の称号を貰えたらの話だけどね」

「もひ、あまり会えなくなるね。ねえ、ブルームーン」「な、なによ、急に真顔になつたりして……」

ミーシャの目から涙があふれた。

「…………絶対に…………絶対に、死んだりしちゃダメだからね」ガブリエルも、目にいっぱい涙をためながら微笑んだ。

「わたしたち、いつもあなたの無事を神様に祈つてるから……」

「う、うん…………一人とも、ありがと…………なんだよお、まだ泣くのは早いじゃないか。卒業証書を貰つのはこれからだぞお」

「そ、そうだね」

「つてゆーか、ブルームーン、あんたが一番泣いてるじゃん」

あたしは、制服の袖で涙を拭つた。

「う、つむさい、桜の花びらが田に入つたんだい！」

春風に舞う桜吹雪のカーテンは、甘い匂いを振りまきながら、あたしたちを優しく包みこむ……。

あたしは、何だか胸がいっぱいになつて、いつもより余計にはしゃいで見せた。

「よーし、じゃあ、3人で指切りしよう!」

「なんて……？」

「絶対、また3人で会おうねって」

「おつけー！」

みんな、みんな、元気でね……、あたしは、みんなが幸せに暮らせるように、国を護るためにガンバルから……。けつして死んだりしないから……、みんなの元気な顔を再び見るまでは……、だからだから……。

あれっ？

あたしは、目の前をひらひら舞う桜の花びらが一瞬にして、もう手の届かない遠い彼方へ吹き飛ばされてしまったような気がして思わず息を呑んだ。

「………… 桜吹雪は？」

視界の片隅に、ホタルみたにタバコの火がぼんやり灯っているのが見える。

「弾丸の雨なら、さつきまで大量に降つてたぜ」

あたしは、意識に靄もやが掛かつたまま、虚ろな目で真っ黒い空を見つめていた。

「………… ニーシャと、ガブリエルは？」

「は？ さあな。………… 漆腕の傭兵、ミッキー・三木様ならこ

こにいるけどよ」

「………… あ」

あたしは、急激に甦つた意識の奔流に心を満たされ、ターゴイズブルーの美しい瞳を大きく見開いた。

「あ…………！」

がばっと身を起こす。

「こら、ミキ・ミキー！ サつきは、よくもよくも恐い目に会わせてくれたなあ！」

「やつと田を覚ましたと思つたら、なんだよ、やぶからぼうに！」

「しらばっくれるな！ あたしは、もう自分が死んだと思つて、夢の中での昔の友達に会いに行つてたんだぞ」

ミキ・ミキは、軽快にシユビムワーゲンのハンドルを捌きながら、はははと乾いた声で笑つた。

それにしてもあたしは、どれくらいのあいだ氣を失つていたんだろ？………… 黒々とそびえる木々の狭間から遠くデマヴァンド山の稜線を透かし見れば、もうすでに夜が白々と明け始めているのが分かる。

それにしても、このシユビムワーゲンのボディは、もうガタガタだ。あたしの真ん前に据え付けられていた機関銃も、台座の部分から根っこが折れてしまつて、どうにいったのやら見当たらぬ。

ミキ・ミキのクレイジーめー。今まで、そつとう無茶な運転を繰り返していたに違ひないぞー。

「…………おー、ミキ・ミキ」

「何だ？」

「おまえ、まさかとは思つが……、あたしが氣絶しているあいだに、何かエツチなことしなかつたるーな？」

「してないよ

「ほんとか？」

「ああ……」

ミキ・ミキは、口の右端をにいつとつり上げて笑つた。

「それともなんだ、シミのついたパンツを脱がせてやつた方が良かつたか？」

「あーっ、てめーーー！」

あたしは、ミキ・ミキの胸ぐらに掴み掛かった。

「あたしは、こう見えてこの部隊の司令官だぞ。おまえに、そこまで口ケにされる憶えはないからなあー！」

「わつ、バカ、止める、危ない！」

コントロールを失つたシユビムワーゲンが激しく蛇行する。ミキ・

ミキは、大あわてで鉄橋の方を指さした。

「ブルームーン！ ほらっ、あれを見ろ。すじいだろ？ 敵がどんどん撤退してゆくぞ」

示された方角を見ると、ムイマル川の鉄橋を敵兵がぞろぞろと敗走してゆくのが見えた。おびただしい数の負傷兵をともなつての撤退で、その様子はもはや、這々の体といった表現が当てはまるほど

の惨敗の構図だった。

「…………ほんとだ」

「な、俺の作戦が図に当たつただろ？ やつら、あの多頭竜に蹴散らされて手も足も出なかつたんだぜ」
ミキ・ミキは、得意満面でずり落ちた眼鏡をくいつともち上げた。

「…………多頭竜？」

あたしは、頭の中からすっかり抜け落ちていた、ある重要なファクターに思い当たつた。それは、何だか凶暴で、おぞましくて、思い出しただけで、またまたパンツにシミをつべつてしまいそうなダーグな記憶だつた……。

「そ、そうだつ！」

欠如していた部分の記憶が、瞬時に甦つた。

「そういえば、あの多頭竜はどうなつたんだ？」

あたしは、おそるおそる後ろを振り向いた……。

はたして、そこには……地を這つて必死の形相で追いかけてくる、巨大爬虫類の姿があつたのだ。

「ひえーっ！ あいつつてば、まだ追いかけて来てるの一？」

「づく……。

ブルームーンの場合、ウイスキーがお好きでしょ？

多頭竜の正体は、何のことはない体長1センチほどの水棲生物だ。ヒドラ亜目、ヒドラ科、ヒドロ虫類……。

カンブリア紀に初めて姿を現したこの無脊椎動物は、円筒形の体から何本もの触手をのばしてミジンコなどを捕食する、取るに足らない下等生物だった。

ところが古代ギリシア期に、レルネの沼地に生息する一部の個体が、気紛れな神々から授かつた魔力により突然変異し、やがてドラゴンにも匹敵するほど強大な力を得たのだ。

円筒形の体は、いつしか分厚いウロコで覆われたワニかトカゲのような姿に変じ、複数の触手は巨大な蛇の頭部となつて大型の哺乳類をも補食した。

多頭竜は、その頭部の数に比例して攻撃力を増す。

例えば、8つの頭を持つヤマタノオロチなどは、多頭竜のなかでもかなり高位な部類で、神々にも匹敵する戦闘能力を持つ。多頭竜の最高位は、勇者ヘラクレスと戦つた9頭龍で、ヒンズー教の最高神ビシヌの乗り物であるアナンタ龍などもこれに類する。

今、ブルームーンたちを執拗に追いまわすこの多頭竜は、2つの頭部しか持たないもつともレベルの低いやつだが、それでもその攻撃力は町一つ滅ぼしてしまうほど强大で、ブルームーンは今、ライオンに追われるガゼルの気分を味わっていた。

「ちょっと、ジーさんのおお？　このまま永遠に逃げ続ける気？」

ミキ・ミキは、忌々しげにサイドミラーを覗き見ながら、ちつと舌打ちした。

「ほんと、しつこい野郎だぜ。よっぽど俺たちの「」が喰いたいらしいな」

「食われてたまるか！」

「そう狼狽うぶたえるな、もうすぐ夜が明ける。あいつは夜行性で太陽の光に弱いから、朝まで逃げ切れば」ひつちの勝ちだ」

あたしは、もう一度だけ恐る恐る、後ろをふり返ってみた。

巨大な爪で地面を搔き、蛇のようにくねりながら迫り来る多頭竜ヒュドリの姿は、何度も見ても絶大な迫力をもつてあたしのキュートな心臓を縮み上がらせる。

ぱっくり開いた赤い口からは絶えず涎が糸を引いて後方にたなびいていた。

そして、その口にずらりとならんだ鋭い歯に引っ掛けようにして、食いカスなのであるづ、迷彩ズボンをはいた兵士の足がだらーんとぶら下がっているのが見えた……。

「ひえーっ！」

もういやだ。

この作戦が終了したら、さつさと除隊して故郷に帰ろう。そしてミーシャやガブリエルたちと毎日楽しく過ごすんだ。そうだ、最後にジョバンニのじじいを一発ぶん殴つてから辞めよう。それがいい、積年の恨みを思いつきり晴らしてやる。そして軍人を辞めたら、素敵な彼氏をつくつて夜景の見えるお洒落なマンションで暮らすんだ。夜ともなればシャンパングラス片手に、2人掛けのソファに並んで座つてラブラブいちゃいちゃ……。

「やばい、そろそろ燃料切れだ」

「えーっ！ ど、ど、どーすんのよお？」

「おまえってやつは、どーすんのよーしか言わねえのな。心配すんな、車じゃない、俺様の燃料が切れたと言つたんだ」

そう言つてミキ・ミキは、懐からウイスキーのポケットボトルを取り出してラップ飲みしようとした。

「あーっ、このバカ！ 運転中に酒なんか飲むなー！」

あたしは、その酒ビンを引つたくると思いつきり遠くへ放り投げた。

「あ……、ああ……、ブルームーン、おまえ何でことしてくれたんだ……。あれがないと、俺は……俺は……」

「なんだよ大げさなやつだなー、作戦が終わって基地に戻つたら酒ぐらい浴びるほど飲ませてやるから」

しかし、次第にミキ・ミキの様子が変わつてゆくのが分かつた。あの尊大で、不遜で、傲慢無礼な男が、まるで飼いならした猫みたいに大人しくなつてゆくのだ。

なんだか体もひとまわり小さくなつたみたいだぞ。

そして、それと同時に今まで軽快な走りを見せていたシユビムワーゲンが、徐々にその速度を落としあじめた……。

「お、おこミキ・ミキ……、もつとスピードを上げないと追いつかれるぞ」

すると彼は、か細い声でこいつ言った。

「あのう……、中隊長殿、そろそろ運転を代わつていただけないでしょうか……、自分、もう疲れてしまつて」

「ちゅ、ちゅうたいちゅうどの一？ どうしたミキ・ミキ？ 冗談ならやめてくれよ、今は、あたしたちの命がかかっているんだ」

しかし彼は、情けない顔で首を左右に振つてイヤイヤをした。

「ダメです……、自分、車に乗つてこんなにスピード出したこと、生まれて初めてです」

「うそつけ！」

「本当です。運転免許証だつて、ず一つビゴールド免許なんですよ
「ば、ばかやろっ！ 今はとにかく安全運転なんかしてたら捕まつて食われる。もつとスピードを出せ、アクセルを踏み込むんだあ」

そう喚きながら、ちらりと後ろを振り向くと、あのおぞましい多頭竜の顔が、もうすぐそこまで迫つて来ていた。

「あわわわわ！」

あたしは、カモシカのような足を思いっきり伸ばすと、ミキ・ミキの靴の上からベタンとアクセルを踏み込んだ。グオーンッと唸りをあげてショビムワーゲンが急加速する。

「ちゅ、中隊長殿、止めてください」

「うるさいっ！」

ミキ・ミキが必死になつてあたしの足を避けようとするが、あたしは踏ん張つてアクセルを踏み続けた。

「ひえっ！」

狼狽えたミキ・ミキが、あらぬ方向にハンドルを切つた。そのとたん、シユビムワーゲンは、傍らの岩場にドンッと乗り上げ、そのまま横倒しになつてしまつた。

「きやあ！」

そして90度傾いた車体は、砂埃を巻き上げながら数十メートルほど引きずられたところで、やつとその動きを止めたのだつた。

「くづーっ、痛てて……、ちくしょう、ヒドイ目にあつた」

傷だらけの鎧を引きずつて、やつとのことで車から這い出したあたしの華奢な姿に覆いかぶさるよつにして、黒く巨大なシルエットがぬうつと重なつた……。

「でつ、でつ、出たーっ！」

「づく……。

ブルームーンの場合～あたしだって、ヤルときゃヤル！

蛇の顔を、真正面から見たことがあるだろ？

古くから悪魔の象徴として忌み嫌われ、恐れ崇められてきたこの爬虫類の顔は、見事なまでに無表情だ。

その間の抜けたツラは、むしろ滑稽とさえ言える。

でも表情がないぶんだけ、無機的というか機械じみてるというか、とにかく何を考えているのか分からぬ不気味さがこいつの顔にはある。

あのガラス玉のような感情のかけらもない目にロック・オンされると、へなへなと体中の力が抜けてしまうんだ。

いわゆる蛇に睨まれた蛙つてゆーやつ？

あたしは、星空と重なるようにして頭上に黒々とそびえる2つの影を、ただ茫然と見上げていた。全身をイヤな感じの汗が伝い、手足は金縛りにあつたように動かない。

多頭竜のぱつくり裂けた口からは、不完全燃焼をおこしたガスバーナーの炎みたいに赤い舌がちろちろ出入りしている。あの舌は、獲物のにおいを嗅ぎ分けるために存在するんだ。

あ、あたしのフルーティな体臭を堪能しよーってかあ。
ぞわわわー

あたしの纖細できめ細かなやわ肌は、今や毛をむしられた鳥みた
いに粟立つっていた。

ちょ、ちょっとタンマ、あたしなんか食べても……美味しいかも
しないよ、いや、きっと美味しいに決まってる、だつてムダなお
肉が付かないようにダイエットしてるし、お肌だつて毎日ちゃんと
手入れしているもん。そりや美味しいには決まってるんだけど、
でもでも、ちょっと待って、お願い、早まっちゃダメ……。

蛇眼の呪縛により身動きの取れないあたしは、必死になつて心の声で呼びかけた。テレパシーよ届け！

しかし無表情な目であたしを見つめる多頭竜の頭部が、鎌首をもたげたままぐんと反り返った。

「コードン力学でいうところの位置エネルギーの蓄積つてゆーやつ？ よーするに、反動をつけてあたしの事を一気にパクッと飲み込もうとしてるんだ。ああっ、万事休す！

もうだめだあ……。

死ぬ時はもつと美しく散りたかった、せめて汚れたパンツだけでもはき換えておけばよかつた、ひーん、あたしつてば、最後は蛇に食われて死んじゃうんだあ、願わくば極楽浄土へ旅立たんことを、なんまんだぶ、なんまんだぶ、なんまんだぶ……

などとクリスチャンであるはずのあたしが錯乱して念佛なんか唱え始めたとき、突然の爆発音とともに多頭竜の側頭部からぱあっと炎の花が咲いた。

なにか火器が着弾したらしい。

さすがに鋼鉄なみのウロコを持つこいつでも、弾丸がドタマにヒットしてはたまらない。それなりのダメージは被つたらしく巨体がぐらりとよろめいた。

「中隊長どのーつ、『』無事ですかーつ？」

見ると、グレネード・ランチャーを携えたライマー軍曹があたしに向かって大声で呼びかけていた。その周りには、彼に付き従う大勢の兵たちが銃を片手に喚声を上げている。

ライマー、あんたつて最高の部下だ！ けっきょく、最後の最後に頼りになるのはライマー、お前だけだよ……。

「あ、ありがとう、よく来てくれたね……」

「中隊長殿、危険ですから早くそいつから離れて下さい！」

そう言つとライマー軍曹は、兵たちに片手で合図を送つた。たちまち彼らの手にした銃火器が一斉に火を吹く。

「ケチケチするなーっ、全弾撃ち尽くせーっ！」

夜明け間近の薄闇に耳をつんざく発砲音が反響し、無数の銃弾が次々と黒い巨体に吸い込まれていった……。

さすがにこれだけの一斉照射を浴びれば、いかなる頑丈な多頭龍とてたまたものではないだろう。

あたしは、土俵際でうつちゃられた力士みたいに豪快に崩れ落ちる多頭竜の姿を想像した。

しかし、この化け物は、存外平気な様子で、天に向かつて低く咆哮したかと思うと、今度は補食するターゲットをあたしからライマーたちに変更したらしく、その重機のような巨体をのつそりと彼らの方に向けたのだ。

あつ、今度はライマーたちが危ない……。

そう思つた瞬間

多頭竜ヒラタツノリがあたしに背を向けたことにより、その蛇眼による呪縛から解き放たれたのだ。

よーし、反撃するぞお！

心強いライマーたちの出現により、あたしの熱いハートは、今や猛烈にファイティング・スピリットを取り戻していたのだ。

女の子つて気分が変わりやすい。
（ジガシタ）

憎い多頭竜めえー、叩きのめして、切り刻んで、蒲焼きにしてや

る！

あたしは騎士剣を振り上げると、多頭竜の太い尾を足がかりに、
そのゴツゴツした背中を猛然と駆け上がつた。と同時に、古代ヘブ
ライ語の呪文スペル^{ヒュードラ}を長々と詠唱する。たちまち騎士剣の刀身に刻まれた

神代文字が輝きだし、神聖な魔力のオーラが青白い炎となつて刀先を中心ごるぐる渦を巻き始めた……。

高位聖靈魔法の魔力注入だ！インフュージョン

無数の光の粒子がもの凄い勢いで刀身に吸い込まれてゆく……。そして溢れんばかりの魔力がマグマのように刃先から噴き上がる、周囲の空間にパチパチッと眩いスパークがはじける。凝縮されたパワーがソニックブームを呼び起こし、あたしは全身に帶電した焼けつくような静電気を放出して、ぶわっと金髪を逆立てた。

時空が歪んでキーンと耳鳴りがする……。

いつくぞお……。

小山のような多頭竜の背を一気に走破したあたしは、やがて首から上の急勾配を軽やかに駆け上ると、蛇の頭部を蹴つてポーンと跳んだ。

そして意味もなく一回転したあたしは、そのままの勢いで多頭竜の眉間に、稻妻のごとく騎士剣の一撃を叩き込んだのだ！

「やあーっ！」

みしつ……

鈍いイヤな音がした。

多頭竜の頭蓋骨が陥没した音だ。

ついでに、あのガラス玉みたいな眼球がポポーンと豆鉄砲みたいに飛び出し、雑草の上を口々口々と転がった……。

やがて、ぐおおおおという断末魔の低い唸り声が、陰に籠もつてもの凄く、天地を地鳴りのように震わせたのだった……。

.....
。

ブルームーンの場合～勝利の夜明け

「あまつたあ！」

あたしは、電柱ほどの高さもある多頭龍の頭頂ヒョウドウから華麗に飛び降りると、着地と同時に両手を高々と振り上げ、まるで体操選手みたいにびしつとフィーリッシュのポーズを決めた。

あの獰猛な多頭龍を一撃のもとに倒したんだ、あたしつてば本当にスゴイ！ まさに騎士のカガミだね！

さあみんな、あたしを賞賛するのだー。

まるでグリコの商標みたいに両手を伸ばして決めのポーズをとるあたしを、しかしライマー軍曹はじめ我が軍の兵士たちは啞然として見守つた。

ん、どうこと……？

ライマー軍曹が鯉みたいに口をパクパクさせている。

んー、聞こえないよお。

もう一度耳を澄ましてよく聞くと、せかんに「後ろつ、後ろつ」と言っているのが分かる。

うしろー？

あたしは、何か重大な事実を見落としているような気がしてハッとなつた。

ドキッと心臓が高鳴る。

やばい、すっかり忘れてた！

あたしは顔を引きつらせながら、恐る恐る後ろをふり返った……。

ひえーっ。

そ、そこのだ、多頭龍には、頭が二つあったのだ！

あたしが叩きのめした方の頭は、皮をむいた魚肉ソーセージみたいにダラーンとだらしなく地に垂れていた。しかし残るもうひとつ

の頭は、眼光すさまじく沸騰したヤカンみたいに怒りを露わにしていたのだ。

真っ赤な口に、氷柱みたいな牙がぎらつと光る。

ああダメだ、本格的におじつとかびつそり……

ぐわおうーっという死に物狂いの咆哮をほとばしらせて、多頭竜ヒラヌガラがあたしに襲いかかる。

「きやあ！」

あたしは、からうじて地面を一回転してその攻撃をかわした。しかし怒り狂った多頭竜は、執拗に何度も襲い掛かり、あたしは立ち上がるヒマさえヒマられず、地面をゴロゴロといろがり続けた。ピンクの可愛い鎧はもう傷だらけ、おまけに命の次に大切な騎士剣もどつかに放ってしまっていた。

「中隊長殿、ひとまず逃げて下さい！」

ライマー軍曹が、腰だめにかまえたグレネード・ランチャーをばひゅん！ と一発放つた。弾は、あやまたず多頭竜の頭部に命中し、やつは一瞬ひるんでその動きを止めた。あたしはそのスキに素早く立ち上がり、無我夢中で走った。

逃げるが勝ちだい！ ってゆーか逃げないと殺される。

ところが一〇メートルも走らないうちに、あたしの体がずしつと重くなつた。

「中隊長殿ー、助けてくださいーー」

見ると気絶から覚めたミキ・ミキが、あたしの腰にすがりついていた。

「うわー、バカー、この手を放せー！」

あたしは懸命にミキ・ミキを振り払おうとしたが、恐怖におののく彼の手はコルセットのように固く巻きついて離れない。それどころか

ろか、ここはあたしのキュー^トなヒップに顔を押し付けていた。

「きやあ！ こ、このエッチ、変態野郎！」

すん

ヒュードラ

と多頭竜が一步迫る。

「わやあー ミキ・ミキのバカバカーー、放せつてば、もつ最悪つ
！」

あたしは、筋トレする野球選手みたいにミキ・ミキのアホを腰に
引きずつたまま、死に物狂いで逃げようとした。

「うー、重い……、女の子には絶対ムリ……」

すん、すん、すずん

ヒュードラ

と多頭竜がさらに猛然と迫る。あたしはもう、恐くて恐くて後ろ
を振り返ることできなかつた。

「あたしが、まさに絶体絶命 つて、これで何度もだらう、死
に至りになつたの……？ ええと、1回でしょ、2回、3回……

…

などと指を折りながら死にかけた回数を勘定していると、あたし
の顔にペチュッと生ぬるい液体が降りかかつた。

な、何だ？ 気持ち悪い……。

顔に付いたネバネバを手で拭い、そおつーと上を見上げてみる…

…。と、そこには……多頭竜のでつかい口があつた。

ひえーっ、これって多頭竜のよだれだ！

とうといあたしは腰を抜かし、その場にぺしゃんと座り込んでし
まつた。

さつきまで激情アドレナリンと発情フェロモン大放出だったあた
しのファイティング・スピリットは、いまやゲシュタルト崩壊をお
こし、ついには自我喪失のため幼児退行を引き起こしてしまつてい
た。

「ふえーん、かいじゅ「ハコロイモお、かいじゅ「ハコロイモお、かいじゅ「ハコロイモお……」

あたしは両ヒジを左右にウンウン振りながら、がんぜない幼児のよつこ泣きじゅくつた。

そのとせ……。

遠くテマガアンド山の頂をかすめて、サーチと一直線に朝陽が差し込んだ。

ああ、それは何と神々しい旭日昇天……。

そのアポロンの光線は、まるで輝ける一振の聖剣のように夜の大氣を切り裂きながら、真っ直ぐに多頭竜の五体をつらぬいた。やがてあの禍々しい巨躯が燐光を放つたようにじょうつと輝き出す。

とたんに多頭竜の蛇頭が苦しそうに呻き声を上げた。

「やつた、夜が明けたぞ！」

「勝利の朝だ！」

兵士たちが口々に喚声を上げる。

多頭竜は陽光のまぶしさにきりきり舞いした後、やがて、のたうつよつにマイムル川の河岸まで這つてゆき、ざぶんとその四体を清流に沈めたのであつた……。

「中隊長殿、中隊長殿、泣きやんでください、我らの勝利でござりますぞー！」

と、ライマー軍曹に搖り動かされ、3歳児から元の18歳児に戻つたあたしは、はつと我に返つた。

「え……？ 勝つたの？」

「さよーり」

「多頭竜は……？」

「シッポを巻いて逃げ失せました」

ほんとー？

あたしは、ヴィーナスのように表情を輝かせながら立ち上がった。知らず知らずのうちに、手にガッシュポーズが生まれる。その姿は、まるで花柄のスクリーントーンを背景いっぱいに貼り付けたみたいに晴れ晴れしていた。

…………あたしたち、勝つたんだあ。

じわっと涙目になる。あたしは鎧の袖で涙を拭うと、いまだ腰に巻き付いている//キ・//キの頭を一発ぶん殴った。

「ひらひ、//キ・//キー……いつまでひとのヒップにしがみついてんだあ！」

「も、申し訳あつません！　あまりにも形の良いお尻だつたもので

……」

あたしは、もう一発//キ・//キをぶん殴つてから、ライマー軍曹以下、忠実な兵士たちに向かつて声をはり上げた。

「よーし、みんなあ、基地に凱旋するぞー！　今夜は祝宴だあ！」

「おーっ！」

兵たちが、手を打つてやんやの喚声をおくる。そんな祝福ムードの中、通信兵があわてて駆け寄ってきた。

「中隊長殿、総司令部より入電です」

通信兵が、背負っていた野外通信機をあたしの方に向けると、そこからまるでアッカンバーをするように感熱紙がカタカタと排出された。

「おお、さつそく国王陛下よつの祝電かあ。気が早いなあ、だれが報告したんだろ？？」

あたしは、祝電の打たれた紙切れを抜き取るとライマー軍曹に手渡した。

「ねえライマー、みんなに聞こえるように大っきな声で読んでみて
「はっ、かしこまりました」

ライマー軍曹は、えへんと胸を張った。全員が騒ぐのをやめその声に注目する。あたしは陛下よつたまわる賛辞の言葉に胸をトキめ

かせた。

あんなにガンバッタんだもん、思いつきり褒めて褒めて！

「えー、では読み上げます……」

ライマー軍曹は、威儀を正し、総司令部よりの電報を声高らかに読み上げた。

「本日4時00分、王都ハ、ツイ一陥落ス。軍ハタダチニ解散シ、敵ニ投降スルコト……あれつ？」

つづく……。

ブルームーンの場合～ラーメン食べたい

北の大陸を縦断するメタルロードは、古より国と国とを結ぶ交通のかなめだ。

おもに北部山岳地帯で採掘されるレアメタル、オリハルコンの鉱石を南部商業都市群へと運ぶために使われたことからその名がついた。

そしてこのメタルロードの中継地として栄えたのが、ブルームーンたちの故国ペーシュダード共和国なのだ。

形骸化された古式ゆかしい王制を敷く小さな国だが、交易でさえ、豊かな物資と自由な気風にあふれる平和な国だった。

半年前、極北の大国、ラゴス首長国連邦が侵略してくるまでは……。

ペーシュダードの日抜き通りを空つ風が吹き抜ける。

からーん、からん、じろりろり……

静まり返った街に、空き缶の転がる音だけがむなしく反響する。ほんの数日前までは、この通りの両側を賑々しくショーウィンドウが飾り、流行のファッショングで着飾つた若者があふれ、ドーナツ店に女子高生がたむろし、パチンコ店から軍艦マーチが流れ、健康食品店に老人が列をなし、メイド服のオネーちゃんが笑顔でティッシュを配つていたのだが、ラゴス占領軍によつて国中に戒厳令が布告されてからは見る影もない。

此ノ戒厳令ハ占領軍ガ其ノ兵備ヲ以テ占領スル屬国ヲ警戒スル為ノ法デアル

- 一、属国ハ一切ノ政治行政司法権ヲ占領軍ノ軍衙ニ帰属スル
- 一、占領軍ハ属国ノ兵器軍事施設若クハ属国人民ノ動産不動産ヲ

占有破壊燐燒セシムル

一、占領軍ハ属国出入ノ陸海通路ヲ封鎖シ車両及ビ諸物品ヲ検査

セシムル

一、占領軍ハ属国ノ報道ヲ規制シ郵信電報ヲ開緘セシムル

一、属国人民ハ許可無ク外出スル事此ヲ禁ズル

完全に人通りの絶えた繁華街というものは、まるでお芝居の書割かきわりみたいな滑稽さと非現実感をかもしだす。

シャツターの下ろされた建物は何だかいつもより小さく感じ、総じて、街そのものが縮小コピーされたみたいに矮小化され、スケールダウンしている。

動ぐものといえば工サを漁る野良犬の寂しげな姿だけだが、それもラゴス軍の軍用車両が土埃を舞い上げながら通り過ぎると、尾を巻いて裏路地へと逃げ込んでしまう。

まさにゴーストタウンというやつだ。

その色彩を失った殺風景な街並みにぽつんと一軒、嘗みの明かりを灯している店があつた。

激辛ラーメン 珍珍軒

バラックみたいな建物の厨房にある小さな窓からは、もうもうと白い湯気が立ち上っている。雜居ビルのわずかなすき間に建つ小さなラーメン店だ。色あせた暖簾のれんが風にはたはたと揺らめいている…。

がらりつ

「へい、らつしゃーい」

その暖簾を手でかき分け、建て付けの悪い引き戸を勢いよく開いて、デニムのショートパンツをはいた女の子が入ってきた。厨房の湯気がいつせいにたなびく。

店の外観からも想像できるように、狭い店内は雑然としていた。

表通りを見透かすガラス窓にはヒビが入り、それをセロテープで補修している。壁に鉛でとめられたお品書きはすっかり変色し、反対側の壁には、聞いたこともないような芸能人のサイン入り色紙がびっしりと飾られていた。

そして折れ釘に引っ掛けた古いトランジスタラジオが、絶えずも悲しい演歌を歌い上げている……。

店のカウンター席には、先客として白いブラウスを着た女の子が、すました顔でレンゲを口へと運んでいた。

「どうやら他に客はないようだ。

「じつめーん、待ったあ？」

ショートパンツの女の子がへらへらと愛想笑いを浮かべながら隣の席に座る。

「18分と30秒の遅刻ですわ」

ブラウスの女の子が、携帯電話の時刻表示に手をやりながら冷たく言った。ショートパンツの子は、悪びれる様子もなく背負つてきたショルダーバッグを下ろすと、カウンターの中に入ることの店のオヤジに「元気よく呼びかけた。

「おっちゃん、超激辛キムチラーメンひとつね！」

「お客さん、毎回毎回それつすね。今に痔になつても知りませんよ」

「きやははは！」

ショートパンツの子は、ひとしきり笑つてから、隣でつんとすましているブラウスの子の顔を覗き込んだ。

「あーん、ルーダーベつてば、そんなに怒らないでー。開いてる病院がないか、駆けずり回つてたのよー」

ブラウスを着た女の子は、ルーダーベといつりじい。

「……病院？」

そのルーダーベが、はしを止めて不思議そうな顔をした。

「ねえアシ、あなたどこか怪我でもしているの？」

アシと呼ばれたショートパンツの子が、ショルダーバッグから取り出したポケットティッシュでちーんと鼻をかみながら首をぶんぶん左右にふった。

「ううん、産婦人科をさがしてたの」

ルーダーベが、アシの顔をまじまじと見つめる。

「産婦人科に……、いつたい何の用で？」

アシが、へにゅっと笑いながら言った。

「だつて、ほらあ、あたしたちつて、いつ敵に捕まっちゃうか分かんない身でしょー。こんなに可愛い女の子が飢えた敵兵に拉致されたらどーなると思うー？ もしかして、あーんな事やーーんな事をされちゃうかも知れないじゃなーい。だからね……」

アシは、錠剤の入った紙袋をルーダーベの前にぽんと置いた。

「はい、これルーダーベの分

「な、なによ、これ…………？」

「避妊薬」

「 ぱつ」

ルーダーベは真っ赤になつた。

「バッカじやないの、あなたつて人はつ！」

「きやははは、転ばぬ先の杖つて言つじやなーい

そこに超激辛キムチラーメンが運ばれてきた。

「へい、お待ちい」

「わーい」

ぱちんと割りばしを開くアシに向かつて、ルーダーベがぼそりと言つた。

「次の襲撃目標が決まりましたわ

「どこお？」

アシが、ずるりと麺を吸い込みながら訊ねる。ルーダーベは、コップの水をひとくち飲んで、その唇をそつとレースのハンカチで拭いながら言った。

「王城よ……、國土陛下をお救いもつゝあがます」

ハリハリ。

ブルームーンの命令～真夜中のランナウェイ

国境に設置された検問所を通過して、ラゴス軍の車列がペーシュダードに乗り入れてきた。

車列といつても貨物輸送用の10トン積みヘビーローリーが1台と、それを護衛するためのジープが2台だけだ。このところペーシュダードでは、こういった車の往来を日に何度も見かける。

向かう先はこの国の王都リーバス、そして運んでいるのは兵舎などを造営するための仮設資材だ。

王の居城を占領したラゴス軍は、ただちにそこを彼らの南部方面派遣軍の本営として使用することに決めた。古色蒼然とした白亜の名城を、最新鋭の軍事基地に造りかえようというわけだ。彼らは、ここを足がかりとして北の大陸制覇に乗り出すつもりでいる。

そのための工事が、いま急ピッチで進められているところだつた

……。

引きちぎった石綿のような雲が、夜空一面に散りばめられていた。白い月が、その灰色の雲に何度も吸い込まれてはまた姿を現している……。

仮設資材を積んだラゴス軍の車列は、不快な排気ガスをまき散らしながら夜の林道をひた走っていた。王都リーバスへ向かう道は他にもあるのだが、この鬱蒼とした広葉樹林を抜けるのが一番の近道なのだ。

モスグリーンに塗られた軍用のヘビーローリーは、不機嫌そうなディーゼルエンジン音を響かせながら、それでも曲がりくねった舗装路を軽快に飛ばしていた。その前後を、誇らしげに機銃を備えたジープが護衛している。

ヘビーローリーには、軍服にヘルメット姿のラゴス兵が2人乗つ

ていた。

ヘッドライトの明かりに誘われた羽虫がフロントガラスに体当たるするたび、せわしなくワイパーが動きだす。窓から見える景色といえば、一定のリズムで現れては尾を引いて消えてゆく街灯の光だけだ。

音楽が流れている。

ダッシュボードの横にぶら下げたトランジスタラジオが、大昔に流行した歌謡曲を切々と歌い上げていた。しかしその音楽をかき消すほどの大声で、助手席の上等兵がハンドルを握る新兵に話しかけていた。

「そしたらよお、その男いつたい何て言いやがったと思つ?」

「さ、さあ……?」

戸惑いを隠せない新兵に向かつて、上等兵は笑いを噛み殺しながら言つ。

「へい、ジョージ、冗談言つちやいけねえぜ、そいつは俺のおふくろだ　だつてよ！　わーっはっはっは！」

クソ面白くもないアメリカンジョークを延々聞かされるほど苦痛なことはない。新兵は、うんざりしながらも仕方なしに愛想笑いを返した。

「はは……はははは……、そ、それ最高っすね」

「な、そう思うだろ？　こんど他のやつらに話してやれよ、きっと大ウケするぜ」

適当に相づちを打つていると、早くも次なるジョークが飛び出しそうな雰囲気になってきたので、これはたまらないと思い新兵は話題を変えてみた。

「あ、あの、ところで、このまえ輪重兵連隊に配属された同期のやつから聞いたんすけど、なんか最近パルチザンとか名乗る連中が、我々の施設や車両を次々と襲つてるらしいですね」

「あ？　ああ……」

さらなるジョークを話し始める機先を制されて、上等兵は少し不

機嫌そうにうなづいた。

「ふん、どうせ民兵か敗残兵が徒党を組んで悪あがきしてるんだろうよ。そのうち残らずとつ捕まつて銃殺刑になるさ」

「そ、そうですね……、でも聞いた話じゃあ、なんでもそのバルチザンの中に騎士が混じつてるとか……」

「騎士い？ この国の騎士はみんな投獄されたよ。まあよしんば、運良く逃げおおせたやつが1人か2人混じつていたとしてもだなあ、騎士つたつて所詮は人間だ、そんなもんたいして脅威にはならねえよ」

ふんと鼻をならしながら上等兵はタバコに火を付けた。嫌煙家の新兵が、そつと窓を開ける。

「と、ところがつすね、その騎士っていうのが凄えやつらしくて、ピンクの悪魔とか騎士団の最終兵器とか言われてるバケモンで、収容施設だつて堂々と魔法でぶち壊してから逃亡したつて噂なんですよ」「くつ、下らねえジョークだ。そりゃおめえ、だれかが話をつくってんだよ」

上等兵は、笑いながらふつと煙を吐き出した。

と、そのとき不意に前を走るジープのストップランプが点灯し、つられてローリーも急停車する。

「おつと、何だあ？」

見ると、1台の貨物用トラックが斜めになつて進路を塞いでいた。どうやら車輪が側溝にはまつて立ち往生しているらしく、運転手らしき男が途方に暮れていた。すかさずジープの兵が駆け寄り、何事か話しかけている。それを見て、ローリーの上等兵は不機嫌そうに舌打ちした。

「ちつ、戒厳令を聞いてねえのかよ、馬鹿野郎が……。民間人は勝手に出歩くな、つってんだろーが」

やがてジープの2人は、運転手と一緒になつてトラックを押し始めたがビクともせず、仕方なくヘビーローリーの2人へ向かつて手

招きをした。

「ちくしょう、お呼びがかかつたぜ……。仕方ねえ、行くぞ」
上等兵は、新兵をうながしてローリーを降りると、くわえていたタバコをぷつと吐き捨てた。

近くで見るとそれは宅配用の中型トラックで、運転手は若い男だつた。その気弱そうな運転手に上等兵が食つてかかった。

「おい、てめえ、こんな時間に車を走らせるとは度胸じゃねえか。戒厳令のことは知ってるよなあつ？」

「す、すみません。どうしても朝までに生鮮品を届けなくちゃならなくつて……」

申し訳なさそうな顔でしきりに侘びる運転手を見て、上等兵は意地悪く言った。

「生鮮品だあ？ ようし、荷台の中を見せてみる。もしおかしな物でも積んでいやがつたら、てめえ、この場で銃殺刑だからな」

そう言つて彼は新兵に田配せをした。やがて荷台の扉がゆっくりと開かれる……。

「きやははは！ 生鮮品でえーっす！」

突然、荷台の中からぽーんと飛び出してきたのは、ピンク色の鎧を身につけたアシだ。彼女は両手に一挺ずつ真っ赤なベレッタを携えていて、その銃口が上等兵と新兵の眉間にぴたりと据えられる。

「おいらあ、動くと、じゅーをつけーだぞ、ひやはは！」

続いて自動小銃を構えた男たちが次々と荷台から飛び出してくる。そして4人のラゴス兵は、抵抗する間もなくあつさり取り押さえられてしまつたのだ。

「くそつ、例のパルチザンが現れやがつた！」

異変に気づいた最後列のジープが、車を発進させようとギアをロードを入れる。しかしその運転手の首すじに、刃物の冷たい感触がひたと押し当てられた……。

「おつと、動かないでいただけます?」

「……き、貴様いつの間に」

驚愕した運転手がルームミラーに手をやると、ピンク色の鎧を着たルーダーベが後部座席で仁王立ちになっていた。彼女は、キューティクルぴかぴかのロングヘアを、片手でふわっとかき上げながら言つた。

「私、基本的に箸より重たい物は持ちたくありませんの。手間をかけさせないでほしいですわ」

騎士剣を突きつけられた運転手は、顔を引きつらせながらゆっくりと両手を上げた。その隙に、助手席の兵が腰の拳銃にそつと手をのばす……。

とたんに、騎士剣の刀身からふわっと炎が吹き上がつた。

「ここでファイアーダンスを躍りたいのなら、それでもよくなつてよ！」

「うわあ！ 熱かい、熱かい、熱かいーっ」
たまらず2人のラゴス兵はジープから転がり出た。そこを駆けつけたパルチザンたちが取り押さえる。

「ふん、他愛のない」

ルーダーベは、すとんとジープから飛びおりると騎士剣を鞘におさめた。

「現金輸送車」「ーだつ、かんりょー！」

アシガ、左右の太ももに巻いたガンベルトに赤いベレッタを押し込みながら近づいてきた。ルーダーベは、つんと澄ました顔でヘビ一口ーリーの荷台を見上げる。

「あら、積荷はすべて、プレハブ兵舎を建てるための仮設資材と聞いてますわよ」

「なーんだ、軍資金調達のために襲つたんじゃないのかー」「ちがいますわ。これを使って、王城に乗り込むのよ」

そこにパルチザンのリーダーが駆け寄ってきた。

「おーい、お二人さん、こっちの準備は完了した。あんた方は、城内に侵入するまでこの荷台の中に隠れていてくれ」

パルチザンたちは、全員ラゴス兵から奪つた軍服に着替えていた。これで味方のフリをして城の警備を突破しようというわけだ。

「わかりましたわ。さあアシ、さっさと荷台に乗り込みましょう」「何だか、かくれんぼみたいでワクワクするねー」

ばか言つてんぢやないわよと愚痴をこぼしながらルーダーベが荷台の後ろに回り込み、扉のかんぬきを外す。そしてアシと2人で勢いよく取つ手を引くと、錆びついた悲鳴をあげて両開きの鉄製扉がゆっくり開かれていつた……。

「こ、これは……？」

「何これえ？」

2人は、思わず眉をひそめた。ローリーの荷台には、電話ボックスほどの大きさをした仮設トイレがぎつしりと詰め込まれていたのだ。

「えー、これってトイレじゃーん！」

ルーダーベが、たちまち氣色ばんでリーダーに食つてかかる。

「ちょっと！ 私たちに、この中で隠れていろと仰いますの？ 平民のアシはともかく、私の家は代々近衛騎士をつかさどる子爵家の家柄ですよ」

「あーん、アシの家だつて3代続いた定食屋さんだよー。こんな、ばっちい所に入つたら保健所に怒られるうー」

タハハと苦笑しながらパルチザンのリーダーは、ひたいの汗を拭いつつ2人をなだめた。

「いやあ、申し訳ない。とにかく作戦はもう始まつてるので、城に着くまでのあいだ辛抱してもらえまいが。全ては国王陛下のためということです……」

さすがに国王の名を出されでは、これ以上逆らうわけにもいかず、2人は、しぶしぶ荷台の中へもぐり込んだ。

「まつたく、信じられませんわ
「うわー、くちゅいよお……」

ひつして、ひと悶着あつたがやがて荷台の扉は閉じられ、ラゴス
兵に扮したパルチザンの車列は、何事もなかつたかのように走りだ
した。この林道を抜けると、めざす王城が視界の先にその寝殿造り
の壮麗な姿を現すはずだ……。

「…………ねえルーダーベ
「なによ?」「アシ、おじいこじたくなつちやつたー。」「でしてもいいかな?
「ダメよー」

つづく……。

ブルームーンの場合、キャッスルでハッスル！

パルチザンに乗つ取られたラゴス軍の車列は、まるで死者を運ぶ葬列のようにひつそりと夜の道をひた走った。

途中、2度ほどラゴス軍の検問に引っ掛けたが、自軍の車両といふこともあって全く疑われることなく通過できた。

やがてラジオの深夜放送がそろそろ宗教番組に切り替わるうかという刻限、一行はようやくペーシュダード王の居城にたどり着いた。その城は、よく観光ガイドブックなどで見かける壯麗な寝殿造りの古城だった……。

城をぐるりと囲む塹壕さかいごうに、湿氣つた闇の息づかいが満ちている。

月の姿をゆらゆらと游がせる水面が、わき上がるような蛙鳴あめいに包まれていた。

この城の背後には、北の大陸で3番目に長いといわれる大河、クリヨン川が深い碧色の水を湛え、優雅なせせらぎを奏でていた。その雄大な流れの対岸には、電飾の星を散りばめた王都リーバスの繁華街が、戒厳令下にもかかわらず不夜城のごとく華やぎ、酔いしれるラゴス兵たちを、股を広げて待ちかまえていた。

城門より内へと導く跳ね橋は下りたままだが、代わりに物々しいバリケードが築かれ、つねに十数人の歩哨が出ずつぱりで夜詰めていた。

先頭を走るジープがバリケードの前で停車すると、すかさず歩哨の兵が駆け寄ってくる。

しかし、深夜ゆえ退屈しきっていたのであるが、その歩哨は提示した命令書をろくに見もしないでつき返すと、壇を切つたように話しあじめた。

「やあ、遠いところを」苦労だったな、ここは初めてかい？」

「いや、3度目だ。ところで、おい、兵舎もだいぶ出来上がったようじゃないか」

「まあな。ここ」の兵舎が完成したら、さっそく本国からお偉いさんがやって来るんだとよ。うわさではアーリア族のドゥルジ総督がこの司令官になるらしいが、まあ俺たち下つ端の兵にとっちゃあ誰が派遣されて来ても同じことさ……。そんな事よりこには、まさに天国だぜ。非番のときにはよ、城の裏側にある水門から船で川を渡つて、向こう岸の繁華街にくり出すんだ。あそこには綺麗なネーチャンがいっぱいいるぜ、おまけに上領軍だから、もうやりたい放題やれるしよ、ひつひつひ……」

「ほう、そいつあご機嫌だな。でもまあ、あまり派手にやらうことだ、パルチザンの連中に目を付けられたら厄介だからな」「へつ、パルチザンなんか眼中にないぜ！」

「そうかい、なら機会があつたらそのうち一緒に酒でも飲もうや。じゃあな……」

まだ喋り足りなさそうな歩哨の兵を後に、パルチザン一行を乗せた車列は城内へと進入した。

ペーシュダードの王というのは、形式上君主として扱われているだけで実際の立場は貴族院の一議員にすぎない。国家の政を運営するのは、あくまで選挙によつて選ばれた宰相なのだ。よつてこの城は、戦時に王が立て籠もる階などではなく、おもに式典を執り行つ斎場や外賓を接待する迎賓館としての役割を担つていた。

小高い城壁に囲まれた敷地に入ると、まず雄大な庭園がひろがつてゐる。

この庭園には中央に大きな池がありそこから小川も流れている。この場所はふだん一般市民にも開放され、観光客やピクニックに訪れる親子連れ、ジョギングやバーボンラングをする人などで賑

わっていた。

そして庭園の中央をはしる舗装路を真っ直ぐ抜けるとまず礼拝堂があり、その奥に豪奢な2階建ての宮殿がそびえ立っている。建物を形づくる白磁の壁には美麗な装飾が施され、内部を飾る調度品の数々もみな贅を尽くしたものばかりだ。

宮殿の左右にはそれぞれ西の対、東の対とよばれる対殿があり、透廊すきろうという壁のない廊下で繋がっている。そして宮殿の奥には、北の塔タワーという巨大な石積みの塔が威風堂々、天を指してそびえ立っていた。

兵舎が造営される敷地は、この東の対と城壁のあいだを埋める雑木林の奥にあった。パルチザン一行は、いつたんそこへ向かうと見せかけて雑木林の中に入り、そこで車を乗り捨てた。

先頭のジープから飛び降りたパルチザンのリーダーが辺りを警戒しながらすばやくベーローリーの扉を開くと、ルーダーベトアシがおぼつかない足どりで姿を現し、そして荷台から降りるなりへたつとその場に倒れ込んだ。

「お、おい、大丈夫か？」

「私、もうダメ、この中のアンモニア臭にすっかり酔ってしまったわ……」

「あーん、お外の空気が美味しいよう」

まるで陸揚げされたマグロみたいにぐでっと横たわる2人を、パルチザンのリーダーが苦笑しながらも懸命になだめた。

「いやあ、済まなかつた。積み荷が何であるかも調べずに車両を強奪したのは我々の不手際だ。いやほんと、お詫びのしようもないよ、ははは……。ところでお2人さん、もうすぐ夜が明けてしまうので、その前に作戦を完了してここを脱出したいのだが、どうだろう、気を取り直してもうひと頑張りしてもらえないか？」

リーダーが平身低頭して頼み込むので、仕方なく2人はのろのろと身を起こした。

「……ああ、そういうえば私たち、Jリージョナリティヤんとしたものを食
口に入れてませんわね」

「わかったわかった、Jの作戦が終了したら何でも好きなものを食
べさせてやるよ」

「何でもと仰いますけど、私はふだんミシコランの3つ星がついた
お店にしか入りませんわよ」

「アシは、お寿司をお好みでお腹一杯食べたーー」

「よし了解した。でもまずは任務を完了しなくてはね、さあ、そう
と決まればいつまでも座つてないで、はい、立つた立つた」

絶対に約束よと言いながらルーダーベとアシは立ち上がり、お尻
に付いた汚れをぱたぱたと手で払い落とした。その間にパルチザン
たちは、全身黒ずくめのボディースーツに着替える。そして頭から
黒い覆面をすっぽり被り、まるで影法師のようになつたリーダーが、
2人に照明弾を手渡しながら言つた。

「いつものように我々は逃走経路を確保しておくから、陛下を救出
したらこれで合図してくれ」

「分かりましたわ」

「がつてん、ショウチのすけー」

やがてパルチザンたちが闇の中へ消えると、残されたルーダーベ
とアシがため息をつきながらライトアップされた宮殿を見上げた。

「さてと……、どうやつてあの宮殿の中に忍び込むかですけど
「は」はーい、アシちゃんに名案がありまーす！」

まるで先生に質問された生徒みたいにアシが右手をぴーんと挙げ
た。その姿を見てルーダーベがやれやれと肩をすくめる。

「あなたの名案が、名案であつた例ではないわ

「あー、ルーダーベつてば、ひどいんだー」

「でも、まあ一応は聞いてあげる、まあ言つて」「うらんなさいな

「へへへ……」

アシは、得意げに鼻をすすりと瞬りながら話しあじめた。

「実はねー、去年の夏頃、とつぜん宮殿の空調設備がイカれちゃってさあ、それでアシちゃん、ジーバンニーのくわジジイに頼まれて仕

方なく配管ピットにもぐり込んで修理をしたわけよ」

「あなたって騎士なんやめて工事屋さんかボイラーテchn技士にでもなつた方が、よっぽど性に合っているんじゃなくつて？」

「でへへ、アシもそう思ひつー。でねでね、そのときお城の設計図面を見たアシちゃんは、その内容を残らずじゆーじゆーな頭脳にインプットしちゃったわけよ」

「つまりは配管のピットをひいて宮殿内部に侵入しようとこいつとね？」

「そゆこと。アシが宮殿に忍び込むルートとしてお手頃な配管ピットを的確にチヨイスしてあげるか！」

左手を腰に当て、右手の人さし指をフリフリしながら得意満面に微笑むアシを冷ややかな目で見ながら、ルーダーベはふんと鼻を鳴らした。

「たいして名案とも思えないけど……、まあいいわ、他に良い作戦も思ひ浮かばないし、それでこきましょ」「じやあ決まりね！」

アシが指をぱちんと鳴らした。

つづく……。

ブルームーンの場合／天使の微笑み

ルーダーベは、貴族アウシェダール家のひとり娘だ。

アウシェダール家の先祖は、ペーシュダード王がまだ本物の王様だった頃から代々近衛騎士としてこれに仕えてきた。近衛騎士とは国王直属の騎士団で、複雑な命令系統がなく、王や王族が直接采配を振るつて動かすことのできる特殊な部隊だ。よつて昔から近衛騎士になることは大変名誉とされており、また彼らのほとんどが爵位を授かり、いくらかの領地を分け与えられていた。

やがてペーシュダードが民主化されてからもこれら貴族階級はそのまま残り、領主としての地位は失つたものの、彼らの多くが貴族院議員として名士の家柄を保ち続けた。

そしてアウシェダール家は、5等爵の4番目、子爵の家柄なのだ。

だからルーダーベは、ちょっとびりお高くとまつている。

けつして本人に悪気はないのだが、幼い頃から召使いたちにかしづかれて育つてきたせいもあり、自然とわがままな性分が身についてしまつたのだ。

とくに彼女は、待つことが大きらいだつた。

「ちょっとー、まだですの！？」

夜目にも手入れのゆきどぞいでいると分かるロングヘアをふわっとかき上げながら、ルーダーベが尖つた声を出した。

「ふあいふあーい」

一方、それに答えるアシは、マグライトを口にくわえたまま壁と向き合つてゐる。両手にドライバーと六角レンチを握りしめ、それでも彼女は、いま宮殿裏手の壁に取り付けられた室外機を取り外しているところだつた。

「まーつたく……、この悪趣味な鎧には辟易しますわ。これを『ザ

インした人つて、暗中での戦闘をまったく視野に入れてませんわね。だつてそうでしょ？ こんなに目立つ恰好をしていては、それこそ敵に自分の居場所を知らせるようなものじゃない。だいたい、この節操のないショッキングピンクって、どう考へても清楚な私には似合わないのよ」

あなたは似合つていいわね、とアシに言つと、彼女は肩の高さで切り揃えたブロンドを揺らしながら、うんうんとうなずいた。

「ひやつひやつひや」

「ちょっとアシ、物をくわえたまま笑わないでください。つてほらあ、口の端からよだれがこぼれてるじゃない！」

ルーダーベがレースのハンカチを取り出してアシの口を拭おうとしたとき、不意に彼女が立ち上がった。

「やつたー、作業しゅーりょー」

「きやあ」

あやうくアシに頭突きを食らわされそうになつたルーダーベは、仰け反つて尻餅をついた。

「危ないわね、急に立ち上がらないでちょうどいい」

「きやはは、ごめんごめん。でもほらあ、侵入口ができるよー」

見ると、小さな本箱ほどもある室外機を壁に固定していたボルトが残らず外され、配管やら電気コードもきれいに切断されていた。そしてその四角い機械をぎりぎりと手で押しのけると、宮殿内部へと続く配管ピットが、その真っ黒い口を不気味にのぞかせたのだった。這つて進まなければ通れそうもないその狭いスペースに、しかしアシは何の躊躇もなくスルリともぐり込んだ。

「ちょ、ちょっと待つてよ」

慌ててルーダーベが後を追う……。

その配管ピットは、宮殿内部の天井や床下、壁と壁とのすき間といつた、わずかなスペースを迷路のようにつなげて造つたメンテナンス用のピットで、当然のことながら、ただでさえ狭苦しい中に給

排水の管が束になつて延びている。そして、その配管のジョイント部分からポタポタと水が漏れだし、小さな水たまりをつくつて、這いつくばるルーダーベたちの手足を汚した。さらに内部にはカビくさい淀んだ空気が充満していく不快な事にのつえない。

たちまちルーダーベの機嫌が悪くなる……。

「ちょっとアシ、あなた自分が今どの辺りにいるか、ちゃんと分かつて先へ進んでるんでしょうね？」

「あん……」

「中は真っ暗だし、迷路のように入りこんでいて……、こんな所でもし迷子にでもなつたら、私たちこのままマリラになつてしまつてしまうよ」

「やん……」

「ねえ、さつきからなに変な声を出しちこるの？ もつとまじめにやつて下さらないと困ります」

「だつて、ルーダーベがアシのお尻をつつ突くんだもん」

「あなたがグズグズしているからでしょ。私、じどもの頃から狭い所は苦手なの、ほらほら、もつと早く進んでちょーだいな」
またまたルーダーベがマグライトの先でアシのお尻をつんづんと突いた。

「やーだー、もうー あんまりつつ突くと始まつちやうよー」

「始まるつて……何が？」

「生理」

「げげつ！ 「冗談じやないわ」

「きやははは、貴族のお嬢様が、げげつ！ だつてー」

それから30分ほどあいだ2人はピットの中を這い回つた。

彼女たちが足にはくプレートブーツは二ハイの長さがあるので、膝小僧をすりむくことはないが、しかし四つん這いの姿勢を長く続けるのは非常につらい。

やがてルーダーベがそろそろヒステリーの兆しを見せはじめたと

き、アシが不意に前進を止めた。勢い余ったルーダーベが顔面からアシのお尻に激突する。

「つふつ

「きやん！」

痛つたーい、トルーダーベが鼻の頭をおさえながら抗議した。

「ちょっと、急に立ち止まらないでもらえます。いつたい、どうしたのよ？　ま、まさか……本当に生理が始まったんじゃないでしょうね」

「ちがうよー、確かにこの辺に一箇所、出口があつたような気がしたんだけど……」

頭の中にインプットされている宮殿内部の図面を必死に思い起こしながら、マグライトで辺りを照らしていたアシが、不意に「あつた！」と叫んだ。彼女がライトで示すその先にはコンクリート壁が一部引っ込んだ部分があり、そこに小さなステンレス製の扉が隠されていたのだ。

「これこれ！　こつから外に出られるよー」

そう言つてアシがその扉に這い寄り、小さな取っ手をぐいっと引いた。

「それっ！」

少し鎧び付いた音をさせて扉が勢いよく開く。でも次の瞬間、彼女は思わず落胆の声をあげてしまった。

「あれれー、おつかしいな。扉の向こう側を、さらに木の壁がふさいでる」

首を傾げるアシを押しのけて、ルーダーベが怪訝そうな顔をのぞかせてきた。

「ねえ、その先はいったい宮殿の何処につながっているの？」

「えーと確か、国王陛下の御休息の間だつたと思うけど……」

進路をふさぐ木の壁を、人さし指の爪でコリコリ引っかきながら、アシが間延びした声でたずねた。

「ねー、これ、どーしよーかー？」

そのやる気のなさそうな声を聞いて、はやくピットから抜け出しざくてイライラしているルーダーベが、たまりかねたように言った。
「えーい、もう、そんな壁ぶつ壊しちゃいなさい!」

この城の宮殿は、基本的に国王とその家族の住居として建てられたものだ。

そのなかでも御休息の間は、王様が一人つきりでくつろげる特別な空間なのだ。その内部は超高级ホテルの最上級スイートルームなみにゴージャスで、しかも国王が趣味で集めている貴重な骨董品の数々が所狭しと飾られていた。

今、この御休息の間にある王様お気に入りの籐椅子にふんぞり返っているのは、ラゴス軍から司令官代行として派遣されているガンツ大佐だ。彼には、新しい司令官が赴任してくるまでに、ぜひともやつておかなければならぬ事があった。

それは、目の前の壁に飾られている一枚の絵画を持ち出す事である。

数あるペーシュダード王のコレクションの中でも、ひときわ有名なのがこの絵画『天使の微笑み』だ。大昔にさる高名な画家が描いたもので時価に換算すれば数億ゴールドはくだらないといつ名画だ。ガンツ大佐は、自分の任期が終わる前に、何とかこの絵画を盗み出せないかと思案していたところだった。

「うん、やつぱりあれだな、この場所には贋作を掛けておくとして、それで本物は産業廃棄物を運搬する車両に紛れ込ませて持ち出せば分からぬだらう。うん、そうしよう」

かなり長いこと考え込んだ割には、どうでもいいようなありきたの作戦を思いついた彼は、それでも満足そうな微笑を浮かべると、その厚ぼったい唇にくわえた高級葉巻を嬉しそうにくゅらせた。

「ふつふつふ……」

と、その時　。

ペーシュダードの重要な文化財にも指定されているその貴重な絵画の、ちょうど天使の顔が描かれている部分がバリベリッと破かれ、そこから女の子の顔が、ぬうっとこちらを覗き込んだ。

「な…………？」

そして彼女は、呆れて口をパクパクさせていたるガンツ大佐と田代が合つて、に一つと蠱惑的な微笑みを浮かべた。

「はいはーい、アシちゃんでえーす」

「お、おまえ……」

ガンツ大佐がやつとのことで何かを言おうとしたとき、今度は天使の横に描かれたマリア様の顔にボンと穴があき、そこから真っ赤にペイントされたベレッタM92がその38口径の銃口をのぞかせた。

と同時に、アシがとつておきの啖呵をきる……。

「おい、こりあ、おまえ、ジタバタ騒ぐとドテつ腹に風穴あけてからタンポン突っ込んで血を残らず吸い取つてやるぞ！」

その、あまりに下品なセリフにガンツ大佐は思わず口をあんぐりと開け、そこから高級葉巻がポトリと落ちた。

「きやははは！」

つづく……。

ブルームーンの場合～本氣と冗談は紙一重

「えーっ、これってアシのせいなのー？」

完膚なきまでに破壊され、いまやほとんどフレームだけの姿となつた時価数億ゴールドの名画を指さして、アシがふくれつ面で文句を言つた。

「あら、あなたが破いたんじゃなくつて？」

「だつてえ、ルーダーベがアシのお尻突つきながら壊しちゃいなれー！ つて怒鳴るからあ……」

「さあ、私は知りませんわよ」

ねー、あんたどう思うー？ と、籐椅子にがんじがらめに縛りつけられているガンツ大佐へ向かつてアシが顔を寄せた。大佐は、泣いているのか笑っているのか分からないような表情で、べどもどと答えた。

「……ま、まあ、そうですねえ、この場合さしづめ貴方が実行犯で、あちらにいらっしゃる方が教唆犯きょうさくはんということになりますよ。刑法上は、実行犯を正犯としますので、どちらかと言えば貴方の方が罪が重いような……」

それを聞いてアシが怒つた。ガンツ大佐の襟首をつかみ、ベレッタの銃口をこめかみにぐいと押しつける。

「どーして、どーしてえー、アシは命令されて仕方なくやつただけなのにいー。ひつどーい！」

「落ち着きました、ね、ね。仮に貴方があの名画のことを知らずに破いてしまった、つまり刑法上、善意の者であつた場合、じゅうぶん酌量の余地はありますから

すると今度はルーダーベが、「あら……」と不機嫌そうな顔で近づいてきた。そしてガンツ大佐を見下ろしながらスラリと騎士剣を抜き放つた。彼女の剣はつねにお抱えの研ぎ師が良好な状態にメン

テナンスしているので、プロの板前さんが使う包丁なみに良く切れる。その研ぎ澄まされた刃先が、ガンツ大佐の首筋にピタリと押し当たられた。

「いまの仰りよう、聞き捨てなりませんわねえ。それじゃ あ何ですの、この重要文化財損壊の責任は私の方にあるとでも？」

「いえ、けつしてそのような」

「ねー、こいつ殺しちゃおーかー、唯一の目撃者だしい」

アシが言うと、

「そうね、この人が死ねば名画を破損した犯人は永久に謎のままですものね」

とルーダーベが賛成した。

「ま、待つて下さい。命ばかりはどうか……」

そう言いながらガンツ大佐は、彼女たちが本気で殺すと言つているのかを判断するために、2人の顔を素早く見比べた。

ルーダーベは良家のお嬢様らしく、いかにも冗談の通じなさそうな顔をしている。あら、私はいつだって本気よ、みたいなホンキの『ホ』の字が端正な顔からもはつきりと読み取れるのだ。

こいつは、きっと本気で人を殺すに違いない。

一方、アシの方は、生まれながらに冗談で生きてるような雰囲気がある。本気になるなんてバツカミたーい、と今にも笑い出しそうだが、しかしその冗談にまったく歯止めが掛かっていない氣もする。こいつは、きっと冗談で人を殺すタイプだ。

どちらにしても、こいつら相当にヤバイ！

そう直感したとき、ガンツ大佐の命乞いは本物に変わった。

「こつ、こつ、殺さないで下さい。あなた方の欲しい物は何でも差し上げます。あなた方の知りたい事は何でもお教えします！」

「あらそつ……」

「ふーん……」

ルーダーベとアシが、息が吹きかかるほどガンツ大佐に顔を近づ

けてきた。てらてらと光るリップグロスの奥から、フルーツみたいな甘い香りが漂つてくる……。

そして2人の普段より1オクターブ低い声が不気味に重なった。

「じゃあ、王様の居場所を教えて……」

「き、北の塔の地下です！」

そう答えると同時にガンツ大佐は、じょろっと失禁した……。

城壁に囲まれた敷地の最奥部に、北の塔はあった。

石を積み上げて造られた無粋な四角柱の高層建造物だ。

塔屋の部分は三角屋根になっていて、そこに古めかしい機械式時計がはめ込まれている。また中層階に張り出したテラスには、対空用の機關砲が据え付けられていて一瞬だけ観光客の度肝を抜くが、これはこけ脅しで、王室の式典で空砲をぶつ放すこと以外に使用された例はない。

いずれにしても、一見すると物々しい外観の石塔だが、その実態は単に食料などを備蓄する倉庫にすぎなかつた。

しかし今、この塔を警備するラゴス兵の数は、倉庫番をするにしてはいささか多すぎると言える。やはり北の塔の地下に、王が監禁されているのだ……。

「ねえ、どうしよう、あの小便たれをクローゼットへ押し込んだとき、おしつこが手に付いたあ」

「きやつ！ ちょっと、アシ、その手を私の鎧で拭わないでちょうだい！」

「ねー、ハンカチ貸してー」

「やーよ、汚い」

アシは、うーっと唸りながら辺りをきょろきょろ見回していたが、回廊の壁にラゴス連邦の国旗が飾られているのを発見し、それで丁寧に手を拭つた。

「どうする、また配管ピットの中に潜る？ 地下にある下水道を

経由すれば北の塔に出られるかもよ

「絶対にいや！」

ルーダーベが、ロングヘアを揺らしてふんとそっぽを向いた。

アシが困ったような顔をする。

「えー、じゃあどーするのお?」

「決まってるじゃなし……」

まなじつ

ルーダーベが、きつと眞まなじつを決すると一瞬だけ魔力のオーラがあふれ、彼女の体がぼうつと青白く光った。

「根性で、正面突破するのよ」

アシの頭が、バネの壊れた電気スタンドみたいにカクンと垂れた。

「結局、最後はそうなるのかあ……」

つづく……。

ブルーメーンの場合～アウト・オブ・コントロール！

無粋な石造りの塔は、拉致したお姫様を監禁しておくにはひょりぴり風情がないが、なにせ囚われているのはカイゼル髭をたくわえた肥満氣味のオッサンなので、外觀の善し悪しはこのさいどうでもよい。

むしろ厄介なのは、ケーキにたかる蟻みたいにびっしりとすき間もなく配置された、警備の兵士たちだった。

とくに、2階テラスから正面入り口を見下ろす重機関銃と、その入り口の両脇をかためるショットガンの兵士2名は、相当ヤバイ。重機関銃は、ベルト状になつた弾帯が途切れまるまで撃ちまくることができるし、ショットガンもどうやらポンプ・アクションの要らない連発式セミ・オートマチックのようだ。

塔への入り口は一箇所きりしかないので、ルーダーベとアシが正面突破を図るには、どうしてもこの銃火器の洗礼を受けなくてはならないのだ。

というわけで……。

「ねえ、これ、止めにしなーい？」

いかつい装甲兵員輸送車の運転席に上半身をツンこんだ状態で、アシが言った。

「他にもひとつ良い作戦があるつてばあ。ねえ聞いてるつ？ 例えばさあ、もう一度地下ピットに潜つて電気ケーブルを切断しちやうとかさあ……」

「いいから、やつをとなさー！」

「あん、もうう。ルーダーベつてば強引なんだからあ

ここは、仮設兵舎の建設現場からそつ遠くない場所にある、重機

の格納庫。

そのプレハブ造の倉庫の中は真っ暗で、工事用のユニットクヤーブルドーザーが無造作に乗り捨てられていた。

北の塔に重機で突っ込む。

塔をとりまく厳重な警備を田にして、ルーダーベが導き出した作戦がこれだ。

アシは、「冗談かと思つて彼女の顔を覗き込み、そしてぶるる」と身震いした。ルーダーベって熱い女だ。直情徑行と言つてもいい。つねに本気のオーラを身にまとつたお嬢様、それがルーダーベという女の子だ。

当然のことながらアシの反論はすべて却下され、そして2人はこの格納庫に忍び込んだ。

そのとき偶然見つけたのが、この装甲兵員輸送車なのだ。

6輪のハーフトラックを改造したもので、分厚い装甲版に覆われたその姿は、まるで迷彩がらの巨大なトロツコみたいだ。屋根はなく、窓も、覗き穴ていどの小さな視察口が運転席に取り付けられているだけだ。

まったく、車というよりは、移動する弾除けといった方がぴったりな感じがする。

アシは今、その装甲兵員輸送車の運転席を覗き込んで、何やら作業をしていた。ハンドル下側にあるパネルを取り外し、引っ張り出した電気コードをいじくり回しているのだ。

闇の中、彼女の指先を照らすマグライトの明かりだけが、まるで庭園の芝上に設置された常夜灯みたいに、ぼんやり灯っていた。

車の外では、ルーダーベが騎士剣を手に油断なく見張りをしている。夜中とはいえ、いつラゴス兵がここに入ってくるか分からぬのだ。

彼女はイライラしながら、ドアから突き出しているアシの下半身

を見下ろした。

「ちよつと、まだですか？」

「むーう、軍用車はかっぱりこすりいなあ…………あつ、やうだ。ねえねえ、こんなのがて、じお？ 水道管に睡眠薬を注入してさあ、みんなが寝入ったところを潜入するの。それなり一切ドンパチやらずに済むよ」

「無駄口たたいてないで、早くしてーーだーセーーーなつ」ルーダーベが、プレートブーシのつま先で、アシのお尻をぐりぐりした。

「やーん、やめてよな……」

と、そのとき装甲兵員輸送車の直列6気筒エンジンがグオーン！ と唸りを上げ、マフラーから真っ黒い煙が吐き出された。

「やつた、エンジン掛かったー！」

アシが喜びの声をあげる。

そして彼女が運転席から立ち上がり、腰を浮かせたとたん、すかさずルーダーベが、プレートブーシのかかとでそのお尻をぐいっと助手席側に押し込んだ。

「きやん！」

アシは、はゞみで「ロロン」と一回転して、助手席のドアにしつると頭をぶつけた。

「痛つたーい、ルーダーベのばかあ！ 鬼い！ 悪魔あ！」

アシの抗議にはかまわず、ルーダーベが運転席に乗り込んでバタンとドアを閉める。涙目になつておでこをさすつていたアシは、それを見て驚きの声をあげた。

「えーっ、ルーダーベが運転するのぉ？」

「何よ、悪い？」

「だつてえ、あんたつて運転ちょー下手じゃん」

アシが心配そうに眉をひそめると、ルーダーベは、コラムシフトをかくんと動かしながら言つた。

「一般道を走るわけじゃないからいいのよ。それよりもアシ、あなたこそ、その機関銃でちゃんと私を援護してちょうだいね」

「Jの装甲兵員輸送車には、ブローニングM2機関銃が搭載されているのだ。

ちょうど助手席から立ち上ると、防護盾に囲まれた位置に据え付けられた機関銃のグリップが握れるようになつていて。その銃座を見上げながら、アシがこくつとうなずいた

「うん、分かつた……」

「じゃあ、行きますわよ」

ルーダーベが、べたつとアクセルを踏んだ。とたんに装甲兵員輸送車が、猛スピードで後退する。

勢いよくバックした車は、そのままテール部分から壁に激突した。

「きやあ！」

ガチャンともの凄い音が倉庫内に反響し、はずみで兵員室の乗降用ドアが外れて、ガランと床に落ちた。

「あわわわわ！ ギアがバックに入つてるつてばあ…」

「うるさいわね、ちょっと間違えただけじゃない！」

ルーダーベは、目をつり上げながら乱暴な操作で再びシフトチェンジをした。どうやら、ハンドルを握らせてはいけないタイプの人らしい。

アシは、慌てて車から降りよつとした。

「アシちゃん、いち抜けたー！ Jに降りるね

「させるか！」

アシが逃げるよりわずかに早く、ルーダーベが、ベくんとアクセルを踏み込んだ。

がりつと土を噛んで、総重量約7トンの車体が勢いよく前に飛び出す。アシは座席の上でこりんとひっくり返り、ジタバタともがいた。

「やー、降ーるーしーてえーっ！」

東の空に、いつの間にか金星が輝いていた。明けの明星といつやつだ。

夜空にいっぱいに散りばめられた星々の瞬きは、見つめていると、何やら神秘的な音が聞こえてきそうなどとに壯麗な眺めだ……。

そんな真夜中の静寂を破り、ドッガーン！ と音を立てて格納庫のシャッターが吹っ飛んだ。

つづく……。

ブルームーンの場合～ペンクの悪魔

世界は一家、人類はみな兄弟

と書かれた、平和記念モニュメントの石碑に寄り掛かつて、タバコをふかしている。

ゆっくりと吐き出された煙は、巨大な卒塔婆のようにそびえる北の塔のシルエットへと吸い込まれてゆく……。

辺りは、真夜中の静寂に包まれていた。

いや、よくよく耳を澄ませば、涼しげな水音が聞こえてくる。北の塔から石積みの城壁をへだてた向こう側には、クリヨン河がその水面にゆらゆらと月を游がせながら優雅なせせらぎを奏でているのだ。

「……平和だねい」

そうつぶやくと兵士は、ヘルメットを傾けて足下に火の付いたタバコをふっと吐き捨て、軍靴でじやりと踏みにじった。

ドーンという衝撃音が静寂を破つたのは、その時だ。

「なんだ？」

兵士は、慌てて顔を上げ、きょろきょろと辺りを見回した。

「オイ、今ノ音ハ何ダ？」

すぐに無線機のイヤホンから、警備班長のどなり声がした。すると間髪を入れず、別な兵士の切迫した叫び声が機銃音と重なつて聞こえてくる。

(パタタタタタッ)

「テツ、テツ、敵襲デスッ！」

「オイ、何ガアツタ？ モット詳シク報告シロー！」

(ズダダダーン)

「ウワーッ！」

緊迫した無線でのやり取りを耳にして、兵士は慌てて担いでいた自動小銃を肩から降ろした。その拍子にイヤホンがぼろつと耳から外れる。すると、今まで無線機を通して聞こえていた銃声が、存外自分のすぐ近くで鳴つていてことに気づき、彼は驚いて銃を腰だめに構えた。

「……どこだ？」

彼が背にする御影石の石碑は、高さ5メートルほどもある。その固い表面に背を押し付けて、彼は落ち着かない様子で何度も左右を覗つた……。

グーンという車のエンジン音と樹木を乱暴に薙ぎ倒す音が、次第に近づいて来るのが分かる。ヘルメットのすき間からついつと冷や汗が伝い落ちた。

「どこだ？……どこから来る？」

闇の中、敵の姿は見えず、ただ野太いエンジン音とキャタピラが回転する金属的な摩擦音だけが猛スピードで接近してくるのだ。兵士は、恐怖のため息を荒げ視線を游がせた。

「どうだ、どうだ、どこだ？」

「どこだあーっ！」

ついに彼は恐怖に絶えきれなくなり、手当たり次第に銃を乱射しはじめた。

タンツ、タンツ、タンツ、タンツ、タンツ

「ひやはははーっ！ 死ね死ね死ね死ね、みんな死んじまえーっ」

と、そのときドガーンという耳をつんざく衝突音が、背後から彼を襲つた。

「ひつ」

驚いてふり向いた兵士が目にしたのは、ゆっくりと自分に倒れかかってくる黒々とした石碑のシルエットだった。眼前に迫るその草書体で刻まれた碑文が、彼がこの世で最後に見た映像となる。

世界は一家、人類はみな兄弟

「うわわっ、たつ、たつ、助け……」

ずしんと音がして、巨大な石の塊が兵士を押しつぶした。ひしゃげた手足が、変な角度で石の縁からはみ出している。その石碑には、裏側にも別な文字が刻まれていた。

交通ルールを守ろう

その碑文をキャタピラで踏みしだきながら、総重量7トンの装甲兵員輸送車が横たわる石碑の上を乱暴に乗り越えた。

「ふひやあ！ 鼻血、鼻血つ、鼻血が出たあーつ、もうルーダーベつたら、何で運転してくれんのよお！」

石碑に激突した衝撃で顔面を強打したアシジが、鼻を押さえながら座席の上でのたうち回っていた。その隣では、ルーダーベが、必死の形相でハンドルにしがみついている。

碧玉のような彼女の瞳は、獲物を狩るときの虎のように完全に据わっていた。

「アシちゃん、もう鼻血ブーで大ピンチ！ ねえルーダーベ、タンポン一個分けてえ」

「ちょっと、少しは黙つて下さらない！ ゼンゼン運転に集中できないうじやないの！」

そう苛立たしげに言いながら、ルーダーベは眼前に迫る泉水を避けるべく強引にハンドルを切った。

「きやあ、ぶつかる！」

「こなくそつ！」

ジャリジャリッと前タイヤが土砂を巻き上げ、後輪のキャタピラがズズズースと横滑りして流される。

この装甲兵員輸送車は、戦場での機動能力を高めるために駆動輪を戦車のようなキャタピラに替えていた。だからその気になれば、道なき道を突き進むことだって出来るし、どんなに傍若無人な運転だって可能になるのだ。

「だめだわ、避けきれない。突つ込むわよ」

「ひえええ

けつきよく車は泉水を避けきれず、その澄んだ水を湛えるコンクリート製人工池にざぶんと突っ込んだ。その拍子に、ガーゴイルをかたどつた黒大理石の噴水が倒れ、跳ね上がった水しぶきが、まるでライスシャワーみたいに一人の頭上からふりそそいだ。

「やあん、冷たあい

アシは、犬のように濡れた髪をブルブルツと左右に振つてから、自分の太ももの上でピチピチ跳ねる高級そうな錦鯉を車外へ放り出した。

「やーだ、もう、どこ走つてんのよ。絶叫マシンじゃないんだからね」

「ここには、障害物が多くあるのよ」

「ルーダーベつてば、さっきからアクセル踏みっぱなしじゃない！ ちゃんとブレーキも使ってよ」

「手と足を同時に使って操作するなんて、そんな器用なこと私にはできませんわ」

「あーん、アシちゃん、やつぱり降りるついー！」

と、その時、2人の乗つた装甲兵員輸送車が、バリバリツと枝を鳴らして果樹の植え込みを突つ切り、そして急に視界のひらけた場所に出た。

そこは、北の塔の正面入り口をのぞむ広大な中庭だった。

「ほら御覧なさい、ちゃんと目的地に出られたじやないの。なんだかんだ言つても、私つてさすがだわ」

「たんなる偶然でしょー！」

北の塔の周囲には、大勢のラゴス軍兵士がいた。

彼らは警備班長の指揮の下、等間隔に散開して厳戒態勢で警備に当たっていたのだ。

しかし、植え込みのかげから突如現れた装甲兵員輸送車が、まるで狂ったイノシシのように突進してくるのを見て、そこにいた全員が一瞬色を失つた。

「 ドウシタ？ 何ガアツタ？」

無線機のイヤホンから警備班長の怒鳴り声が聞こえる。はつと我に返つた兵士たちは、みな手に手に自動小銃を構えながら、わらわらと車に群がつた。

「 侵入者ヲ発見シマシタ！ コレヨリ直チ一排除シマス」

幾つもの銃口が夜目にも鮮やかに火を吹く。

タンツ、タンツ、タンツ

「 えーい、邪魔くさい」

ルーダーベは、目の前に立ち塞がるラゴス兵を2人、3人と続けざまに跳ね飛ばした。彼らは、銃を抱えたままボーリングのピンみたいに吹っ飛んだ。

「 ほらアシ、あんたの出番よ。ふだん役に立たないんだから、こういう時くらい頑張りなさいな」

「 あいあいセー」

アシは素早く立ち上るとブローニングM2機関銃の銃把に取りつき、そのまま嬉々としてトリガーを引いた。途端に派手な銃撃音を轟かせ、機関銃の銃口から、まるでゴムホースで花壇に散水するみたいに弾丸がばらまかれた。

グワララララララ !

「 そ、そ、總員退避ーーー！」

駆け寄るラゴス兵は、あたかも見えない壁に行く手を阻まれたごとく、その場でバタバタと倒れ伏した。

「 きやはははーーー！」

銃撃の反動でアシの金髪がぶわっと舞い上がり、スレッシャーで脱穀された米粒のように、薬莢が景気よく飛び散つた。

「 ……あなた、まだ鼻血が出てるわよ」

。うるくへ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5797d/>

チエリー・OH！ベイビー

2010年10月13日13時38分発行